

### 粕谷信次教授 退職記念座談会 : 生い立ち, 修業時代, 学問研究

柏井, 宏之 / HAGIWARA, Susumu [Moderator] / KASHII,  
Hiroyuki / FUKUDOME, Hisao / KAWAKAMI, Tadao / KASUYA,  
Nobuji / 萩原, 進[司会] / 粕谷, 信次 / 川上, 忠雄 / 福  
留, 久大

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

78

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

439

(終了ページ / End Page)

523

(発行年 / Year)

2011-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007464>

# 粕谷信次教授 退職記念座談会

—生い立ち，修業時代，学問研究—

日 時：2010年9月13日（月）13：00～15：00

場 所：法政大学ポアソナードタワー19階  
経済学部資料室

参加者：粕谷 信次（経済学部教授）  
川上 忠雄（法政大学名誉教授）  
福留 久大（九州大学名誉教授）  
柏井 宏之（共生型経済推進フォーラム理事，  
参加型経済研究所研究員）

司 会：萩原 進（経済学部教授）

## やけ跡・やみ市とともに過ごした少年期

**萩原（司会）** これから、2011年3月に法政大学を定年退職される予定である粕谷信次さんのための、退職記念の座談会を始めたいと思います。

法政大学の経済学部では、定年で退職されていかれる先生方のために『経済志林』の退職記念号を発行してきました。記念号は、最終講義と「人と学問」と題する座談会と、それに学部内外の関係者からの寄稿の3部から構成されています。粕谷さんは1940年生まれですので、今年でちょうど70歳。来年の3月に退職される予定です。

まず今日の座談会の参加者に簡単な自己紹介をお願いしたいと思います。

**川上** 粕谷君よりいくつか年上の川上です。法政大学の同僚だった者です。

**柏井** 柏井と申します。1980年代の前半に東京に出てきまして、川上先生、粕谷さんがされていた土曜会という会に参加させていただいて以来、ずっとお付き合いをさせてもらっています。



座談会の様子

**福留** 福留です。私は東大の経済学部で大内力先生のゼミに入って、学部時代は粕谷さんが1年上だったのです。大学院で粕谷さんは中小企業論の論文を書くのに非常に慎重で、修士論文を3年かけて書かれたのです。私は粗製乱造だったのですが、通例の2年で明治時代の米穀市場についての修士論文を1966年に出しました。ということで博士課程は3年間一緒でした。1968年に全共闘運動がありましたが、東大の経済の大学院は一風変わっていきまして、自治会ごと全共闘に入っていたのです。それで安田講堂の不寝番という仕事がありまして（笑）、一緒に粕谷さんと当番をしたりしました。そういう仲ですね。

あと、私は1年東北大学の助手をして、次に九大に行きましたので、断続的に粕谷さんと会ったりいろいろ論文を交換したりしていました。そういう関係です。

**萩原** 私は現在『経済志林』の編集をやっています、今日は司会を務めさせていただきます。粕谷さんとわたしは、同じ年に法政大学経済学部の助手に採用されましたので、長年にわたる同僚にあたります。粕谷さんも私も、他の大学に移った経験がありませんので、生涯にわたる同僚といえると思います。そういうことで、遠慮なく話しあえる仲ですので、今日はちょっと面白い座談会ができるのではないかと期待しています。

では、粕谷さん、自己紹介抜きでいきなり座談会に入らせてもらってもよろしいでしょうか。

**粕谷** 座談会の進行が自己紹介になりますよね（笑）。

**萩原** そうですね。

**粕谷** 法政に職を得たのは萩原さんと同じ1969年ですので同期ですね。ただ、萩原さんは大学院に入りながら、給料をもらう一般助手。私は特別助手で、1年で教授会に参加して講義を持たされた。それ以来の付き合いです。

**萩原** まず粕谷さんの40余年にわたる研究生生活の、入り口のお話からお聞きしたいと思います。経済学に関心を持ち始めたのは、高校生時代あ

たりからだと思いますが、前史として、まず粕谷さんの生い立ちをお話してください。

**粕谷** 生まれは港区の白金台で、1940年、柏井さんと同じですよ。

私のじいさんのその前の代ぐらいまでは、千葉で造り酒屋をやっていたのです。それが明治になってだんだん零落してしまいました。じいさんがさらに悪くて、親に勘当されたのです。それで東京のスラム街へ逃れてきた。だから、父親は小さいときから相当苦勞した。学校は高等小学校ぐらいまでなのではないかと思います。高等小学校でも家計補助のため、今でいうバイトか何かせざるを得ない状態だったようです。お袋がその話を後で聞いて、「いやぁ、私も貧乏だったが、これにはかなわない」と言っていました。

実はそのお袋のほうも大変だったらしい。お袋の親父は剣道好きの行田のたび職人だった。しかし、やはり、他の業者の保証人になっていて、不渡りか何かに当たって倒産したのです。それで足立区の千住へお袋の家族が流れてきた。どこでどうなったか知らないけれども、そこで所帯を持った。親父は再婚ですけどもね。親父が一番羽振りがよいときに、私が生まれたのではないかと思うのです。

ところが生まれてすぐというか、昭和15年ですから、じきに太平洋戦争が始まるわけです。

**萩原** 1941年12月7日に真珠湾攻撃がありましたね。

**粕谷** それで一番衝撃的だったのは強制疎開というのがあったのです。空襲でやられたら火事を止めることはできない。だから、一帯を打ち壊して燃えるものをどかすのです。

**萩原** 家屋も破壊してしまうのですか。

**粕谷** 壊してどけて、延焼防止の防火帯を作るわけですね。それに当たっちゃったのです。それが1944年3月、東京大空襲の直前です。それで行くところがないので、お袋の実家が足立区にあったので、ひとまず足立区へ行った。そうしたら、その直後に東京大空襲で全部やられてしまった

のです。それからもう家財も衣類もなく、身一つで転々と疎開していたのですが、1945年の暮れに今の家を買って戻って来たのです。そこは三つ部屋があるのですけれども、3世帯いるのですよ。行ってみたら、うちは7人いるのですが、7人に一間しかないのです（笑）。ということで、栄養状態が悪くから寒い、ひもじい。いろいろ代用食も食べさせられました。だから一応、戦争の被害者ということになりますね。

**萩原** しかし、終戦直後としては平均的な家庭ですよ。1部屋に7人住むというのはそれほど珍しいことではなかった（笑）。

### 両親は低学歴ではあったが教育にはたいへん熱心だった

**粕谷** 親父がちょっと煙たく、怖いのですけれども、その親父に抱きついて寝ていて、ああ、これはしまったと思ったりした（笑）。生活ぶりはそういうところですね。

それで父も母もその前の代が失敗したから、教育をまともに受けられない。しかし向学心があって、上へ行きたかったらしいのです。母も師範学校に行きたかったといっていました。先生から勧められた。しかし断念せざるを得なくて、家計補助の電話交換手かな。親父もそういう状況だったので、余裕はなかったのだけれども、本は無理して買ってくれるし、中学に行ってから英語塾にやってもらったりして、とにかく教育熱心だったということですね。

**萩原** お父さんは、何の仕事で食べていたのですか。

**粕谷** 鉄屋、つまり、鉄鋼問屋に勤めていた。最後は岩井商店に統合されましたが、そこで小僧からたたき上げて、結構、私が生まれる直前ぐらいが一番よかったらしいのですが、さっきの強制疎開と空襲で焼け出されて、一切合財、全部なくなってしまった。

戦後は、証券の外交、つまり歩合で稼げば稼ぐだけもらえるけれども、稼げなければゼロ、そういうので糊口をしのいできたという感じですね。

経済の関係では、株式の罫線を引いていた。ろうそくというのがあるで

しょう？ あんなのを親父がよくやっていた。それでお客さんと話をして、1日何回も取引するお客を何人かつかまえてやっているというような(笑)、そういう感じでしたね。

**福留** 私はいっぺん会ったことがありますよね。何のときかな。粕谷さんのうちに遊びに行ったときですかね。お母さんには2回ぐらい会いました。御両親とも粕谷さんと相似形の体型で、「篤実」を絵にした人という印象を受けました。



粕谷信次氏

**萩原** 戦災で多くの日本人は住宅も仕事も失い、どん底生活をよぎなくされました。特に都市で暮らしていた人々は、配給の食糧だけでは食っていけませんでしたので、衣類などを持って農村にでかけ、衣類と交換に農家からサツマイモなどの食糧を分けてもらった。農家にとっては黄金時代でしたが。

粕谷家の暮らしぶりはたいへん苦しかったようですが、ご両親は子供の教育には比較的熱心で、教育に理解があったわけですね。

**粕谷** 親父に『論語』を読ませられたこともある。親父はそういうことで学校に行けなかったけれども、神田でしょう？ 下町で、割合、親しい年上の友達がいたのですね。それが中学の教科書だとか何かまでちゃんと払い下げてくれて、そういうのに支えられていたみたいですね。それで字が割合旨く、僕と違って結構いい字を書いていたのですよ。

**萩原** 粕谷さんはどんな小学校時代、中学校時代をすごしたのですか。日比谷高校に入る前の時代ですが。

**粕谷** 平凡な子供でしたが、歴史は好きでしたね。本屋へ行って立ち読みをやったのです。買ってもらったものもあるけれども、ほとんど買った

てもらえなくて立ち読みしていて、本屋の本棚の上のほうに箱入りの『世界史』というのがあった。12冊。福村書店だったか。冬休みに納豆売りのバイトをやったのですが、バイトで稼ぐよりも納豆屋がくれたお年玉のほうが多かった（笑）。それで買ったということがある。

**福留** 福村書店のシリーズで生物もの、天文もの、歴史ものとか、小学校上級から中学生ぐらいを相手にした、そういうのがありましたね。

**粕谷** 時代ごとに1冊で、全部で12冊あって、「産業革命」というのもあったけれど、「フランス革命」は読んで面白いと思った。

**萩原** 日比谷高校に入れたのだから、勉強は相当できたということになりそうですね。それは本当だったのですか（笑）。

**福留** 日比谷高校が東大への入学者が全国で一番多いという時期ですからね。相当難しかったはずですよ。

**粕谷** 中学が割合、他の学校区からも寄留して来る生徒が多かった。ものすごく大勢で、1年生のときに1クラス80人ぐらいなのです。一番前の席は教師より後ろで黒板とぴったりくっついた、そういうクラスが僕らのときは9クラス、上の学年は10クラスというようなところですよ。だから、学校教育なんていうのはまともに行っていなかったと思うけれども、数学で怖い教師がいて、その教師に鍛えられたというのがあります。それから英語は中学の終わりぐらいかな、塾へ行った。

### 日本のトップ高校、日比谷高校に合格

**萩原** 大田区立の何という中学校ですか。

**粕谷** 大森第六中学校です。

**福留** そこから日比谷に何人ぐらい入ったのですか。

**粕谷** 何人ぐらい入ったかな。十何人か入ったかな。

**萩原** そんなにたくさん入ったのですか。

**福留** 日比谷高校は大森の中学から行ける学区の中だったのですか。

**粕谷** 学区の中ですよ。つまり資力がないから、まさに一番安く行ける



公立ずたいで大学まで行ったわけですね。

福留 日比谷の学区内にお父さんが家を見つけたというわけでもないのですか。

粕谷 いやいや、焼け出されて、どこにも行くところがないので、それで買ったら、たまたま。

萩原 大田区大森の中学校はどんな中学だったのですか。

粕谷 洗足池の畔にある急ごしらえの安普請の新制中学。

萩原 大田区の海岸よりではなく、高台の九十九谷（つくもだに）の方ですね。

粕谷 もっと北の方です。

萩原 あのへんには馬込文化村と呼ばれていた、知識人たちが住む高級住宅街があったでしょう？

粕谷 6中はそのところからちょっと離れたところ。

萩原 大森といっても高台の下の方、海岸の方はほとんど町工場ばかりですから、労働者の家庭が多かったはずですよ。

粕谷 山の手と言えば山の手かな？古くは荏原郡と呼ばれていた扇状地の上。

萩原 代表的な山の手ですよ。そうしますと粕谷さんは、山の手高級住宅街で育ったお坊ちゃんといわれてもしかたがないのでは…（笑）。

粕谷 そんな高級ではないよ。たまたま買ったのがそれで、その地区が公立でずっと大学まで行かれるところだったというのが幸いしたかな。

萩原 それはそうですね。東京都の23区内に住んでいれば、都立高校はどこも受験できたわけだから。

粕谷 いやいや、日比谷の場合は第1学区だったから、大田区、港区の中学生は日比谷に行けた。

萩原 中央区も同じ第1学区に入っていましたか。

粕谷 中央区は違ってたのじゃないかな。大田、港、品川あたり。

福留 それに千代田区。日比谷そのものが千代田区でしょうから。

粕谷 昔、番町小学校→麴町中学→日比谷高校→東大という進学コースがあったでしょう？ そういう類の生徒が結構いたのですよ。こっちは辺境の六中から行ったという感じだった。

萩原 まさか粕谷さんは中学校で成績がトップだったのではないでしょうね。

粕谷 昔の話だよ。昔の中学だから、今みたいに皆、勉強しなかったから、ちょっとやればそのくらいになっちゃうんだよ（笑）。皆さんもそうでしょう。

萩原 そうでしたか、やっぱりトップだったのだ（笑）。しかも同級生の十数人もが、日比谷高校に入ったのですから、レベルの高い中学校だったわけだ。

日比谷高校は、昔は、学区外に住んでいる中学生が日比谷高校のある第1学区に住民票を移して受験し、学区外から通っているのが多かったといわれています。寄留といわれていますが、日比谷高校の生徒の半分あるいは3分の1ぐらいは寄留生だったのですか。

粕谷 いや、日比谷はあまり知らない。六中は多かったかな。

福留 六中もすでにそういう傾向があったんですか。じゃあ、六中も有名だったんですね。

粕谷 大田区ではね。

福留 そういうところでトップですか。

萩原 それはそうでしょう。大森の洗足あたり、あのへんは東京でも有名な高級住宅街ですから、名門中学の大森6中でトップであったとすれば、ひたすら東大への道を歩んでいたことになりますね。

粕谷 いや、第一、小学校のときは、僕も周りの友達も、日比谷とか、東大というのを知らなかった。そのころ、大学進学率なんて、後からみんなで振り返ると小学校時代の同窓が、六大学全部にそろって入っていたのです。しかし、進学率は1割ちょっとかな。

萩原 田園調布も近くにあるでしょう。あの超高級住宅街も大田区に

あるのですよ。

粕谷 だから、あのへんから来た人もいる。

萩原 日本では最高に文化水準の高い地域なわけだ(笑)。だから文化村とも呼ばれていたのです。粕谷さんは、小林よしのり『東大一直線』のモデルのような方ですね。(笑)

### 早熟な秀才が多かった日比谷高校

福留 立教大学の経済学部の教授をしている斎藤精一郎、あれはどこで一緒だったのですか。中学校から？修士論文を出した後、粕谷さんと一緒に、大分、宮崎、鹿児島と旅行をしました。私は郷里の鹿児島で終わりにしたのですが、粕谷さんは、当時日銀の熊本支店に居た斉藤を頼って熊本へ廻りました。

粕谷 斎藤精一郎は高校からですね。

福留 しかし、家が近くだったのでしょうか？

粕谷 そう、遊び友達。夏、一緒にプールへ行ったりしたね。

福留 中学は別だったのですね。

粕谷 別でした。これは高校のときの話になりますが、彼はものすごく早熟で、だいたいマルクス主義というのははしかだと言って、若いときにかかるのだけれども、中学でかかって、高校では、もう卒業していた(笑)。というようなのが結構いるのですよ。

萩原 いましたね、そういうひどくませた高校生が。当時は、とっちゃん坊などといわれていましたが。

粕谷 まだ、こっちは入門もしていないのに。

萩原 日比谷高校時代は、比較的平凡な高校生だったのですか。少なくともとっちゃん坊やではなかった(笑)。

粕谷 そう。だから、そういう早熟なエリート群とは違って、平凡な、それでも歴史は好きだったかな。

萩原 粕谷さんの学年には経済学者の野口悠紀雄がいたのではないで

すか。

**粕谷** クラスが違うけどね。

**萩原** それから、東大を出て大蔵省へ行った榊原英資も、日比谷の同級生ではないですか。

**福留** 榊原英資は東大での学年は私と一緒にです。だから、粕谷さんよりは1年下のはずです。しかし、彼はアメリカに留学していたので、合格発表では米国ニューヨーク市立高校出身となっています。当時は出身高校まで発表していたのですね。留学前に日比谷にいたのか否か、それはよくわかりません。

**粕谷** それから同じクラスに国会議員の息子が2人、そのうちの1人は早く死んでしまったけれども、町村という国会議員が今もいるでしょう。あれは弟の方なのですよ。兄貴と一緒にだった。兄貴はたしか三菱商事へ行って、残念にも、まもなくか、死んでしまった。

**萩原** 町村兄弟の弟のほうと同級だったのですか。

**福留** いや、兄貴のほうでしょう。弟の町村信孝は私より年齢は3つぐらい下かな。東大経済学部の卒業年次は5年下です。

**粕谷** それがエリートというか、そういう連中で、ただ、例の民青へ行って割合がんばった川上徹も一緒にのクラスだったですね。

**萩原** 川上徹は、民青の委員長にまでなった代々木派の秀才ですね。

**粕谷** 一方の旗頭だった。ちょうどそこはまだ勤評か何かのときで、少し影響をうけたかな。高校時代の社会科の時間で公民というのがあったんです。今の政治経済かな。

そのときに大河内一男さんの『経済学入門』がテキストだった。だから、経済学を始めたわけです。そうすると川上徹だとか、えらいエリートがいるでしょう。それがいろいろと言うわけです。それでソ連の『経済学教科書』など、大河内さんのより面白く読んだ。そこで初めてマルクス経済学、「唯物史観だ」「例の公式だ」などというのに入門した。それで、「デモにいかう」とか「理論と実践は統一しなきゃいけない」とか、だいが言われた

けれども、「いや、ちょっと待ってよ」と。自分で納得しないと、なかなかそういうのに入れないという感じで怖気づいていたんですね。

しかし、それが残っていて、とにかくこういうのがあるんだということで関心は持たざるを得なかった。結局、それにひかれて、今まで来たという感じです。

### 小学校のA先生から大きな影響を受ける

その前に高校時代、今でもそうですが、僕に大きな影響を与えた人がいます。高校2年のときにAmerican Field Serviceでアメリカに行った女の子、さっき言った英語塾にもいた女の子ですが、その送別会を小学校でやった。その送別会前後に小学校に遊びに行ったら、A教諭というのがいたのですが、これが変わり者で、一番初めに手にした『Das Kapital』は彼から大学入学祝いに貰ったものなのです。

小学校に、日教組の活動と関係がするのか定かでないのですが、読書サークルみたいなのがあって、そういう仲間の中にいたんですけれども、ものすごく勉強好きで、語学、とくに意味論に取り組んでいた。それと、教育相談、子供の相談など、カウンセリングをやっていた。Client Centered Counselingですね。ロジャーズを日本に紹介した友田不二男というのがいるんですが、彼に師事していた。

フロイトのように外から、上の目線から精神分析をするのではなくて、クライアントと一緒にあって同じ目線で、エリクソンのように肩を並べてコミュニケーションしていく。そうすると、心のいろいろなゆがみを自覚できるようになるというような理論なのです。

面白いのは希望して低学年の授業を主に持っていたけれども、低学年では一律に評価なんてすべきじゃないと反対して評価しなかった。子供は勝手に遊んでいて、教室の中でわあわあやっていたけれども、いずれ秩序が出てくるだろうと期待してね(笑)。そんなことをやっているうちに父兄からものすごい文句が来て、たいへんだったという話です。そういうユニー

クな人なのです。

それですっかり仲良くなってしまった。だから友達の影響というのは、学校での友達よりも彼との付き合いの方が大きかったかもしれません。ちょっと年上なのですが。僕は付き合う人はだいたい年上が多い。

**萩原** その方は小学校の先生で、粕谷さんは日比谷高校の学生だったわけですね。

**粕谷** 2年生のとき。そこから付き合いが始まって、最近でこそあまり行き来はないですが、しばらく前まで。

**萩原** その方が後に粕谷さんの奥さんというわけではないですよ。

**粕谷** まさか（笑）。読書サークルの中にいて仲良くなったのは、そういう小学校の教諭だけではなくて、給食を作る給食のお兄さんも。これがまた変わって、禅だとか山水画だとか、また、フォイエールバッハの話もしてくれる。えらい酒飲みで、最後は毎日、壁に掛けた山水画の仙人と木の下で酒を酌み交わし、結局、肝臓を悪くして亡くなってしまいました。

**萩原** 戦後の社会運動の中でもものすごく大きな比重を占めていたのがサークル運動なのです。しかもサークルは職場というよりか、どちらかという地域を基盤にしていた。大田区のサークル活動は特に有名なのです。海岸よりには町工場が集中していて労働者がたくさん住んでいた。高台のほうは文化村で、左翼の知識人などが多く住んでいた。そんな環境なのでサークル活動が特に盛んだったわけです。ガリ版刷りの同人雑誌が、わずか10ページ足らずの同人誌がずいぶん出ている。

**粕谷** 話す内容はあまり深くないのです。いろいろな問題のダベリングという感じです。本当にたまに読書会らしく、何か本を読んだり、感想を言い合ったりするぐらいで。『賃金、価格および利潤』くらい読んだかな。そんな程度でね。しかし僕の基盤はそこと同じで、だから、大学へ行って安保闘争なんかがあっても、だいたいそういう社共路線止まりで、ブントだとか何とかからは程遠かった感じですね。

## 好きだった科目は日本史と世界史

萩原 日比谷高校では、サークルには属していなかったのですか。

粕谷 あまりやらなかった。入ったサークルが不活発でほとんど活動しなかったけれども、地理・歴史研究会というのがあった。時々鎌倉の寺に行ったかな。

中学では日本史がすごく好きだった。そういう先生がいた。しかし高校に来たときには、えらくコスモポリタンになって、日本に生まれたから日本史をやるといのはどうしてだとおもって、日本史は全然やっていない。それで、世界史をやったり、人文地理をやったかな。というのが高校時代、大学に入るまで。

萩原 読書傾向は、どんな風だったのでしょうか。高校生時代というところ、だいたい白樺派とかロマン・ローランとかの甘ったるいヒューマニズムにあこがれるタイプの人と、ニーチェなどのニヒリスティックな世界に惹かれる傾向の人がいましたね。粕谷さんはどっち…。

粕谷 ニーチェまでは行かなくて肯定的なほう、トルストイとかそっちのほうで、だから、普通の極めてポピュラーな青春小説。ニーチェはもっと後で。

萩原 武者小路実篤の『友情』なんかは、いつ頃読みました？ 今ではとても恥ずかしくて読めたものじゃないと思いますけども（笑）。

粕谷 『愛と死』だとか、いろいろあったな。それは中高、なんとなく中高というのは割合続いているのですよね。しかし、主に高校ですね。それで友達と話をしたりする感じだな。

## 親密な・有意味な世界が消えてしまう恐怖に時々襲われた

粕谷 ただ、そこでその小学校のA教諭との話もあるけれども、僕の原体験というか、ぼさっとしていると時々、自分の存在がなくなる気がするのです。そういう感じに襲われる。

**福留** それはどういうことですか。自分の存在がなくなるというのは。

**粕谷** つまり、意味の失われた機械的な世界の中において、自分というのなくなるのです。ただ意味のない物体が動いている、あるいは動かない。それでものすごく恐怖にとりつかれるわけです。

そこから戻るのに家族の食卓だとか団欒など親密な世界を思い出して、そこで意味を回復して、自分のアイデンティティも回復する。死んで生き返ったような感じですね。

**萩原** それについては何かの本で読んだことがありますよ。精神病の一つですよ。自我がすっと抜けてしまうという。

**粕谷** そうだろうと思うのだ。分裂症まではいかないけれども、ちょっとその傾向があった。それで自分とは何だ、アイデンティティは何だとか、そういう言葉は使わなかったけれども。それと、祖母がいて、信仰心が篤かった。高校の文集に書いたことがあるのだけれども、お盆の迎え火を焚きながら、「まあ、見えるよ、おじいさん」とか、僕には死んだ弟が1人いて、その弟にいうように、「よく来たね」とか、本当にそこにいるような感じでやっている。

そうすると人間の認識は何だとか、世界は何だとか、そういうことを考えざるを得なくなった。バートランド・ラッセルの『西洋哲学史』を読んでいたら、パークリーの懐疑論に出合った。それで友達に鉛筆を出して、「鉛筆はあるのか、ないのか」とかと、問いかけたら怪訝な顔をされた（笑）。

**福留** それは高校のときですか。

**粕谷** 高校のとき。

**萩原** ドイツ語でドッペルゲンガーという幻想をともなう病気があるけれども。自我が抜け出してしまって、2人になっちゃうのですね。

**粕谷** 2人ではなくて消えてしまうのです。

**萩原** 正常なときでも人が2人に見えるという。

**粕谷** それとは違うけれども、一度意味を失って物体だけの世界になる。恐怖を感じて、懐かしい生活世界に戻ろうとすると、夕飯時の家族



の団欒などを急いで思い浮かべると効果があった。

福 留 そこが落ち着くわけですか。

粕 谷 それを思い出すと自分に戻れるのです。生き返るという感じですね。そういう経験があるので。

萩 原 今でもずっと続いていますか？

粕 谷 今はちょっとないけれども（笑）。

萩 原 妄想なのでしょうね。誇大妄想の傾向は、青年期はものすごく強いでしょう？

粕 谷 しかし、結構、中年になっても、そういう感じに襲われたことがあるけれども。

萩 原 惜しいな。粕谷さんのような妄想の強い人は、詩人になれる資質があるのですよ。

粕 谷 かもしれないな（笑）。

川 上 間違えたかな（笑）。

萩 原 妄想癖の強い人には、経済学などという実証的な地味な学問は、ぜんぜん向かないと思いますかね。

粕 谷 そこがたぶん一番問題で、作家でも何とかの世界、誰々の世界ってあるじゃない。経済学でも自分の世界、自分の経済学というのがつくれたらいいなと思ったりした。そうなので、だんだんと実証から離れてきたかな。

その傾向があって、哲学では現象学に行き易いのですね。つまり、例えば、科学でも、唯物史観でも、なんでも、今こうある世界は、この生きている時代のこういう人たちの誰も疑わない一番のコンセンサス、そのなかにいる人にはそれが最も確かなものなのですね。

だから、たとえば高校時代に考えたのは、犬から見たら世界は違っていらろうなど。我々人間の頭脳を持ち、こういうコミュニケーションを持ち、こういう経験をした。だから、こういう文化あるいは科学もできた。その世界は、別のところから見たら、異星人、宇宙人が見たら、全然違うかも

しれないなど。だから、唯物史観、あるいはなんでも科学的だという理論も、さらにそもそも科学性というのも、初めから、これが大真理だというふうにしなくて、もう少し根源的に考え直してもよいのじゃないかという考え方に、もともと近づきやすい。

**萩原** それだけ妄想が強い人は文学に向いていますよ。文学のほうになぜ行かなかったのか。経済学はやはり実学的な学問で、誇大妄想狂的なのはマルクス経済学だけです。

**粕谷** だからマルクス経済学にひかれて、他の経済学にはひかれなかった（笑）。

**萩原** 経済学者は、お医者さんでいえば虫歯を治療する歯医者さんのようなものです。経済学は歯学のような学問ですから、およそ若者が興味を持つような学問ではないと思うのです。

**粕井** 僕も今度送ってもらった資料を読んで、「とにかく畏怖の念と気後れの心理状態に陥った」とか、「お前はいつまでたっても青いと言われてる」とか書いてあるのを見て、すごく初期の大江健三郎の『遅れてきた青年』のような心理状態だったのかなと思ったから、この時代は文学青年だったなという印象を受けたのです。ですが、今の話は面白かったですね。

**萩原** 大江健三郎にほんとうによく似ていますね（笑）。

**粕谷** 光栄にも、一度そう言われたことがある。

**萩原** 文学の道に進んでいたら芥川賞作家になれたかもしれない（笑）。

**福留** 今、思い出しましたが、粕谷さんから、他の人の目になって自分を見るというのは、あれは大学院に入ってからかな。修士論文を書いているときか、割と真剣に粕谷さん、「昨日、福沢諭吉を読んだら」と言ったかな。勝海舟だったかも知れない、何か他人の目で自分を見る必要があると、そういうことが書かれていて、自分も本当にそうだと思ったという。それで今論文を書いている自分をよそから見て、本当にこのまま出しているかどうか、ずいぶん迷っているという話を粕谷さんに聞かされたことがあります。

そして、その続きだったと思うけれども、結局できていたのに出さずに、もう1年かけて、もういっぺん書き直したのですよね。

**粕谷** いや、結局できなかった（笑）。中小企業問題の国際比較まで広げて、その総括をやりながら書こうと思っていたので。

**萩原** 粕谷さんは意外と神経質なのですよ。この座談会もそうです。普通は、退職記念座談会の準備といっても、もっとアバウトなのです。座談会の主人公が、司会の僕に「まあ適当にやってくれよ」というだけで、資料も何も準備してくれない。粕谷さんの場合は、事前に参加者全員に資料を整えて配布したり、司会に段取りまで相談する。昨日の夜も「明日の座談会、時間どおりやれるだろうか」と電話してくるのですよ（笑）。だから、論文を書き上げるのはたいへんだったと思いますね。

#### 大学進学：物理にも興味があったが経済学部決定

**萩原** 東大は文Iを受けたのでしょうか？ 法学部も文Iですが、経済学部に進むことは高校時代に決めていたのですか。

**粕谷** いや、僕は高校時代の選択で、今話したような前歴があるから、二つ選択肢があったのです。一つは当然、経済、そのときからマルクス経済学ですよ。周りの影響もあったし、小学校の読書サークルとか、川上徹みみたいな影響もあるし、それで唯物史観というのもそのときはそのまま、これは重要だなと思った。法律、法学なんていうのは上部構造だから、経済学を勉強しないで社会はわかりっこないのだと、経済学に決めていたんです。

しかし、もう一つ物理が好きだったんです。どっちに行くかなと思っていたけれども、いや、物理学というのは素粒子とか何とか、そんなのは難しいだろうな、こっちのほうが無難かというような感じだった。

**福留** 理学部の物理を考えたこともあるのですか。

**粕谷** やめとけとあったのだけれど、今、息子がそっちへ行っている。初期宇宙論、ホーキング博士みたいなことをやっているが、息子も難儀を

しているらしい。やっぱり経済のほうでよかったかな（笑）。

**萩原** 1950年代の後半や1960年代の中頃までは、まだ高度成長が始まってまもない時期でしたので、日本がこれだけの経済力のある国になれるとは誰も予想していなかった。経済学部に進学した学生の進学の動機は、一つは就職に有利だから、つぶしが利く学部だからという実利的な動機でした。しかしもう一つ、戦後日本の貧しい経済をなんとかしなくてはといった、高いところごしを抱いて経済学部に入っていった人もいた。

マルクス経済学を専攻したのは、後者の国土風の人が多かった。彼らは「社会主義革命をやれば世の中はきっとよくなる」といった大ボラというかマルクスの御託宣を信じて（笑）、一生懸命『資本論』の勉強をしていた。しかし、職業革命家になるわけではなく、就職口にはめぐまれていたので、革命家になるリスクもちゃんと回避しながら、日本の将来はどうなっていくのかという大きなことを考えながら学問をやりたくて、経済学部でマル経を勉強したわけですよ。

**粕谷** そんなことは全然考えなかった。

**萩原** 就職のことは考えていなかったのでしょうか？

**粕谷** あまり考えなかった。だいたいゼミの雰囲気そうになっていなかった。卒業するときに10人ぐらいのゼミで、はじめ大学院進学を希望したのが6、7人、それで結局、5人ぐらい。

**福留** 大内ゼミの粕谷さんの学年は大学院に進んだ人が多いんです。粕谷さんでしょう。それから信州大学に行った小湊繁さん、法政の経営学部の小林清人さん、それから高橋満さん、東大の教養学部で中国語の先生になりました。この人も出自は経済学部で、農林省の農業総合研究所にいたのです。

**粕谷** それから統計の腰原さん。

**福留** 横浜国立大学に行きましたね。

**萩原** そうするとアカデミックな仕事に就きたいということだったのですか。

粕谷 まあ、そうですね。それから、僕が大内ゼミに進学したときは安保挫折感が漂っていた。これらどうしようか、しかし、普通のサラリーマンだけはなりたくないという雰囲気が一般的だった。

萩原 あの頃の左翼系の学生は、企業忌避の傾向が非常に強かったですね。民間企業にだけは就職したくないと思っていた。就職は転向への道だと固く信じていた。皆が皆そうだったわけではなかったですが。

粕谷 それで結局、途中で断念して民間に行ったのもいたけれども、次の学年はもう少しばらけていたかな。

福留 次の学年は結局、私しか大学院に行かなかったのです。あとは皆就職したのですが、就職するときたとえば銀行に行く人なんかは、やっぱり搾取する側に回りたくないというような議論をだいぶしていましたよ（笑）。だから、銀行を選ぶというのも、一つはメーカーなんかに行くと労使関係に直接ぶつかるから、まだ銀行だとそこは間接的になるからという気配があったように思います。そういう気配はあのころ、ありましたね。

### 駒場の青春：安保闘争

萩原 それでは東大経済学部の時代に移りましょう。大学に入ったら、いきなり安保闘争ですか。

福留 粕谷さんが2年生のときに1960年安保。だから、1年生のときからもう始まっていますよね。

萩原 1959年から総評と社会党を中心にした安保改定阻止国民会議の統一行動とかデモが、毎月おこなわれていましたからね。全学連は新左翼が主導権を握っていましたが。

福留 1959年11月にデモ隊が国会に突入したというようなことがありましたから、粕谷さんの1年生の終わりぐらいから2年生の6月にかけてですね。2年生の6月15日は樺さんが亡くなった日ですから。

粕谷 やっぱりクラス討論というのがあった。僕には皆さんのような、サークルや党派などの左翼経験はなかったけれども、そのような考えに近

いひとと一緒にいたとか、関心はもっていた。しかし、さっきも言いましたが、ブント（共産主義者同盟）や何やと、セクト的に態度を決めてそこへ飛び込むというところからは遠かった。ただ、議論をやっている無関心ではられないなどは思っていたので、議論を聞いていた。そんな風にやっていて、「じゃあ皆、デモへ行こう」というので、一緒にくっついて行った。

どのセクトの後にくっついて行ったかというのはあまりはっきりしないけれども、圧倒的に影響力を持っていたのはブントでしょう。そういう感じだった。

**萩原** そのとき、駒場の自治会の委員長は小林清人さん？

**福留** 小林さんはその前に学生大会にストライキ提案をして大学から処分を受けて、退学中のはずですよ。2年間の退学。

**萩原** 西部さんはもっと前ですか？

**福留** 1960年が西部、私が入ったときの駒場の委員長が確か西部でした。西部邁さん。その前は誰でしょう？ 都学連の委員長は大内ゼミに行った田中学さんでした。

**萩原** 粕谷さんが2年生のときが安保国会ですね。

**福留** 安保の6.15ですね。

**粕谷** その直後のデモに行ったかな。

**萩原** 安保闘争は、1960年の5～6月がピークで、7月から状況が大きく変わります。安保条約が国会で自然成立した後、急に運動が消えていったわけです。しかし1959年からピークの60年6月までは大衆運動は切れ目なくおこなわれていた。後ろからくっついていった粕谷さんでも、運動に相当時間を食われたでしょう？

**粕谷** いや、そんなに参加しなかった。

**福留** だいたいクラスごとで行っていましたね。私は1960年の入学ですが、6.15のときは亡くなった樺さんの割と近くにいたのです。その日もクラスごとで行きましたね。川上徹は高校が粕谷さんと一緒ですが、大学

は運動のために留年したのか、私のクラスに。

**粕谷** 留年して、文Ⅱか何かに入っていたでしょう。

**福留** 私のクラスでした。私は文Ⅱで入ったのですが、川上がクラスの自治会の委員でしたね。他のセクトの論客としては革マルの小野田がいましたが、有名な小野田兄弟の3番目か、彼も同じクラスでした。あと岩淵慶一という哲学者になった人がいました。

**萩原** 私はピークの6月は高校3年生だったのです。だから樺さんが亡くなったときには、追悼集会とかいろいろな集会に行きました。しかし受験勉強中だったのでたいへんだった（笑）。

西部さんとか当時の全学連のリーダーは、後にいろいろ安保闘争のことを本にしています。西部さんは『六〇年安保 センチメンタル・ジャーニー』を書きましたが、その本の中でおもしろいことを指摘しています。当時の全学連のリーダーの大半が、安保条約の条文を1回も読んだことがない。たぶんデモの参加者にいたっては安保条約の条文なんか読んだ人はゼロだろうと（笑）。社会運動なんてそんなものだといっておられます。そう言えばそうだな、僕も条文を全然読まないで参加していたと思うと笑っていられなくなってしまったのです。どうですか、粕谷さん、ちゃんと条文を読んでいましたか？ 旧条約と新条約の比較をしていましたか。

**粕谷** いや、読まなかった。

**福留** ただ、あのときは結構、ジャーナリズムも取り上げていましたからね。全文をきちんと、法律の全文を読まなくても、問題になっている個所は結構認識に入っていたように思います。『世界』とか何かの雑誌などで。

**萩原** ただ、旧条約と新条約を比較して、共産党はますます対米従属が深まるという分析でした。ところが日本帝国主義の自立化の動きだというのが西部さんたち新左翼の主張でしたよね。そこはどうだったのでしょうか。西部さんは条文を読まないで、うわさ話や新聞記事や何かで日本帝国主義の自立化を予想したのでしょうか（笑）。

**福留** いや、自分たちの議論でしょう？ おそらくブントの中の議論でしょう。

**萩原** 僕は条文を読まないとまずいと思うのだけれども。

**粕谷** 条文は読まない。ただ、こういうことらしいというようなまとめのなところまでで終わり（笑）。

あと、一番大きかったのは戦後民主主義、これが普通の国家になれば自立して、自力でそういう体制をつくっていく。それは憲法9条とか、僕が小学校に入ったのは6・3制の第1期。とにかく民主主義、民主主義ですよ。

だから、条約の条文でこれがどういうふうにといい、政治学的分析ではなくて、岸は昔こうだったとか（笑）、そういうことで「戦後民主主義を守れ」というのにワッと行ってしまったという感じですね。

**萩原** 岸総理自身も後に、そういった類のことを発言していますね。国民は民主主義の危機だといって岸内閣に反対していて、安保条約の改定などは眼中になかったと。岸内閣がもっていた雰囲気みたいなもの、戦争中東条内閣の商工大臣だったということで危険視された。安保闘争って結局はそれでしょう。岸内閣に対する素朴な反発。

**粕井** 東京の場合は、どうなのですか。僕なんか大阪にいたから、6・15は御堂筋デモをやっているのですが、当時、三池闘争が起っていたから1.16ストから始まって、羽田闘争で学生は1.17に行くのですが、その後、僕なんか三池に行くか東京に行くかですごく悩んだ。つまり、三池闘争のほうが労働者階級の闘いだ。こっちの方がやっぱり重要という感じがものすごくあって、僕なんか三池に行ったのです。

**粕谷** そういう階級的分析はなかった（笑）。今言った上っ面な戦後民主主義で、岸が戦時中何をやっていたかということで判断していた。

**萩原** 粕谷さん、それじゃあ東大生というよりも一般大衆だね（笑）。

**粕谷** だから、言ったじゃない。僕は後衛というか、後ろからついていく一般大衆だと。



川上 いや、一般大衆だけではなくて、そのとき、東大の大学院なんかの連中もだいたいそういう感覚だったのです。ちょうどそのとき、今も覚えているけれども、これはとにかく本格的に社会科学的な分析をやらなければいけないというので、大学院で呼びかけて、そういう研究会を組織したんです。

私は法政の助手になったばかりのときですが、だから法政から東大へ行って、それをやろうとしていたの

だけども、行ったら、皆いないんです（笑）。要するにもう樺さんの話になってしまって、そんなのは皆吹っ飛んじゃって出かけてしまっているわけです。

ちゃんと科学的に分析をしてというような雰囲気とはちょっと違う。異様な雰囲気だったけれども、大学人が大学を放り出して街頭へ出ていたという、そういう感じの時期だったですね。

福留 今年の6月に逆の話を聞きました。九大の物理を出た後で東大の美学に入った人ですが、この人は条文をちゃんと読んで、前のよりよくなって、従属性が少なくなっているという認識を持っていたそうです。それで樺さんがクラス討論に来た時に、その人は樺さんを論破したつもりだった。ところが樺さんは「あなたが間違っている」と言って、全然論理的ではなく「間違っている、間違っている」ということだけ言っていたという。そういうことを話してくれましたが、そういう人もいたのでしょうか。

しかし、大多数は粕谷さんや川上さんがおっしゃるような感じだったのではないかと思います。

川上 あのときの条文を実際読めば、自立度が上がっているというの



川上忠雄氏

は当たり前のことですよ。だから、プントのほうは日本帝国主義の自立論になっていたわけで、そういうふうに言うておかしくないと思う。従属が深まるというのは、むしろ共産党の感覚でいうと、そういう議論になったのではないですか。

**福留** あとで田中清玄からでしたか、闘争資金をもらったというので問題になった篠原浩一郎という九大出身の人がいますが。彼なんかは自立が強まって日本が軍国主義化すると、そっちのほうを非常に恐れたというようなことを言っています。

**粕谷** あるとすれば、そういう線のほうに近いな。

**萩原** 僕は西部さんの本を読んで感心し、西部さんに1回、法政大学に話しに来てもらったのです。講演が終わった後、彼も割と酒が好きなので、八王子の居酒屋で長部君と3人で遅くまで飲んだのです。安保闘争についての本、まずとても面白い本だったと感想を述べたうえで、今は安保闘争の全体をどういうふうに見ているかと聞いてみたのです。

やっぱり安保闘争という言葉は使いたくない。あれは安保騒動だと(笑)。それも一種のナショナル・ヒステリー状況、歴史の中によく出てくる現象で、やっている人間は何をやっているか全然わからないで妄想で動いている。だから彼の大衆論には、安保闘争の経験がかなり色濃く反映していると思う。大衆民主主義の怖さというのでしょうか。粕谷さんは後ろからついていったにしろ、どう総括されていますか。

**粕谷** たとえば今でも国連のもとで、もう少し警察的な軍事協力をやれというのがあってしょう。小沢一郎ですよ。普通の国になれば。そうなると、日本もやがて再軍備ということになる。だから、戦後民主主義の旗のもとに、とにかくこれは闘わなければいけないと思ったのです。

そのときはあまり考えなかったけれど、今になれば、大嶽秀夫の本だけ、土曜会で読んだと思うけれど、今までの政党とは違う、あるいは共産党とは全く違う自由な、特に唐牛がそうだと言うのだけれども、新しいポストモダンな運動の要素があったという。

旧来のえらく圧迫を感じるような、そういうハードな雰囲気ではなくて、自由奔放にやる新しいタイプ、そういうのを安保闘争ころにブントがつくりだしたという。ヒステリーと言うけれども、ヒステリーの中に解放があったという。

**萩原** 全共闘運動は別ですよ。今議論しているのは安保闘争です。

**粕谷** そういう要素もあったと思う。

**萩原** 運動のリーダーだった人たちと、付和雷同してくっついていった人々とはだいぶ意識が違うと思うのです。僕は高校生ながら、ブントの指導部は自衛隊の出勤を挑発したのだと思っていました。軍隊が出たら内戦になりますからね。だから、機動隊ではまずいのです。軍隊の出勤をどうやって挑発するか、そして権力奪取に向かって大衆をどう扇動するか。

**川上** いや、当時のブントのリーダーはそこまで頭が働いて、読んで方針を立てるといような状態ではとてもなかったと思う。とてもそうじゃない。ブントの島というのと僕は一緒に自治会運動をやっていたわけで、その後別れましたが、彼の『ブント私史』を実はこの2、3日前から、非常に懐かしく読んだんです。彼が本当に抜きん出っていて、いろいろなことを立案し、まとめて動いたわけですが、その彼がとにかく一寸先が見えていないという感じだった。しかし、ものすごい直観力があって、瞬間瞬間に出てくる問題を考えて対応するという、そういうことでは抜群でしたね。

だから彼は結局、安保の強行採決があって、その後、東大細胞なんて「これでもう終わった」というのに、「そうじゃない。ここから始まりなんだ」というので、ますます先鋭な方針を出して、国会突入をやるわけです。しかし突入した後、何も出てこなかった（笑）。何も出せないということになってしまうんです。

それは見ていてというか、そのころは近くにいなかったけれども、よくわかります。彼のというか、彼のというのはブントのということだけでも。

## 関心は社会科学よりも社会哲学に

萩原 少し話を変えます。粕谷さんが東大時代に出くわした事件としては、安保闘争も大きかったと思いますが、同時並行的に三池闘争がありました。そっちの方には関心は向かわなかったのですか。

粕谷 そっちは情報があまり入らなかった。後になって、いろいろ聞かされましたが。

萩原 僕は高校生のときに大牟田まで行ったのです。三池労組の支援で、高校2年生のときですが。

粕谷 早熟だな（笑）。

萩原 いや、友達も大勢行きましたよ。皆でバイトして交通費をつかってね。だから、向坂教室の向坂先生は尊敬してやまなかった。高校生のときから。

粕谷さんのような生い立ちの人、小さいころから生活の苦勞を知っている人は、学生運動に対して冷ややかなのが普通です。法政大学を最近退職された有名な社会学者、コミュニケーション論の大家で日高六郎の高弟である田中義久さんは、家が貧しかったので高校を卒業して就職した。都庁の給仕になった。給仕をやりながら学費のため、受験勉強をやって、やっと東大に入るのです。

田中さんはよく、自分が給仕の時代は家が没落していた。だから東大生になっても、学生たちがわあわあ過激な議論をしているのを、それこそうつろに聞いていた。「こいつら、ほんとうにプチブルだなー」と感じていたのだと思います。

座談会のために用意してくださった資料を読んでいて、粕谷さんも田中さんと似たような思想的な傾向をたどるのかなと思っていたのです。ところがかなり哲学青年的、妄想家的で、どうしてこんな風になるのかなあと不思議に思っていました。マルクス主義者は、まず労働者や労働者の暮らしに関心をもつのではないのでしょうか。

**粕谷** 哲学癖。さっき言った分裂症の原体験のせいかな。

**萩原** 僕も学生運動に対してはものすごく反感を持っていた。三池の人たち、ああいう炭住で暮らしている労働者たちが本当に好きだった。三池の話は、聞くだけでも感動を覚えたものです。

**福留** 亡くなられた渡辺寛さんから聞いたことがありますが、萩原君は高校生のときから「社会新報」（社会党の機関紙）を配っていたのだよと（笑）。サウナが大好きな青年だということも。

**萩原** 僕は社会党が好きだったのです。鈴木茂三郎や浅沼稻次郎は、特に尊敬していた政治家だった。

**粕谷** 後から考えると、その読書サークルみたいなものに結局、精神的にカウンセリングされていたのだなと。ちょっと何かあると出かけて、その先生と自由にしゃべる。話は万般にわたるのだけれども、そこでいろいろなものを吐き出していたのかな、そういう感じが結構する。そういうクッションが実はあったのかもしれない。

**福留** 先週金曜日、大内ゼミの私の学年の会合があったのです。出席してみて、粕谷さんの印象を皆がどう思っているかと思って聞いたのです。実に控えめな人だったという。私も学部ときはそういう印象ですね。小林清人さんや高橋満さん、そういう人たちが1年上で、この人たちは割と活発に議論するのですが、粕谷さんは意見を求められて、「ああ」と言って、しばらく考え込んでから発言するという、そういう感じを受けましたね。

**萩原** その点は、半分は事実だと思います。しかし僕は長いこと身近にいたから、別の面も知っています。とにかく粕谷さんはしゃべりだしたら止まらない（笑）。普段は人の意見にじっと耳を傾けていますが、ずっと沈黙しているかというところではないのです。全然控えめではなく、人の意見などほとんど聞かずに喋りまくったりします。両面がありますね。

**福留** 反面、ものすごく本格的な議論を展開するとか。

**萩原** コミュニケーションというより、粕谷さんは講義をはじめてし

まったら人のいっていることは耳に入らなくなるのです。

粕谷 少し饒舌なところがあるかもね。

### 大内カゼミに入る

萩原 ところで、3年生になって本郷に移るとゼミがはじまります。数あるゼミの中から、なぜ大内ゼミを選んだのですか。あのころは鈴木鴻一郎さんのゼミもありましたよね。

粕谷 いらっしゃいました。

萩原 なぜ農政学の大内ゼミを選んだのでしょうか。

粕谷 『日本資本主義の農業問題』を読んでいたけれども、鈴木さんの本は全然読まなかったし、あまり知らなかった。

福留 鈴木『原理論』はまだ本になっていなかった。

萩原 ただ、かなり有名な先生方、財政学の武田さんとか、社会政策の大河内さんもまだいたでしょう？

粕谷 大河内さんは一つあったかもしれない。高校のとき、やったからね。しかし、なぜかそっちには行かなかった。

福留 粕谷さんが感銘を受けたのが大塚先生の『近代欧州経済史序説』でしょう。

粕谷 そう、駒場で授業も聴いた。

福留 大内先生の日本農業も、それは『日本資本主義の農業問題』。

粕谷 そうですね。それは本だけでね。東大新書か何か。

福留 明快でしたからね。

粕谷 それから何となく聞いていて、山田盛太郎は農業の封建制が日本資本主義の基底だという。あれは素人から見ると魅力的な、すごくわかりやすいシェーマなんです。それに対抗するのが労農派でしょう？

それから、そのころはまだ原論の限界をあまりよく考えていなかったのだけれども、大内さんは原論を武器にして農業の分析をしている。これはこういう具合に使うという、そういうのにひきつけられたところもあるし、

それで山田盛太郎をやっつけてしまう。そうすると、ほとんど根っからの講座派ではない限りは、「これだ」となるんじゃないかな。

**福留** 山田さんの『分析』を読んだのは大学1年ですか。もっと後ですか？

**粕谷** 後です。

**萩原** 山田さんの『日本資本主義分析』はいつ頃読みましたか？

**粕谷** 本格的に読んだのは大学院に入ってからかな。それまでは解説があるじゃない。議論をするときにちゃんと紹介しているじゃない？ それでわかった気になっていた（笑）。

**萩原** その点は粕谷さん、僕もまったく同じです。大内さんの『日本経済論』上下が出て、上巻のほうの3分の2ぐらいが日本資本主義論争史なのです。あの本の上巻からは非常な感銘を受けました。だから、講座派の日本資本主義論はもうわかってしまったような気でいたのです。本は買って持っていたのですが読まなかった。山田盛太郎の『分析』と平野義太郎の『機構』の2冊はだいに持っていました。

『分析』に一応目を通したのは大学院の終わるころでしょうかね。読んだ印象は、文体が独特で難解な本だという感想につきます。「基底」とか「旋回基軸」といった意味不明の漢字が、しかも旧漢字で次々とでてきます。経済学者というのはひどい文章を書くのだなあと思いました。内容は大内さんがこっぴみじんに粉碎してしまっていますので興味はそそらなかった（笑）。

**粕谷** 両面批判で、労農派も宇野理論から批判するんです。労農派・講座派を止揚するのですが、前の哲学癖というか、どんな議論でも必ずこちらから見れば、こう見えて、逆から見ると違う、だから、真実はそれを止揚したところにあるという認識の弁証法、岩崎武雄の認識の弁証法というのがあって、それを読みいた。大内さんはそれを絵に描いたようなことをやっているなと思って、「これだ」と思った。上部構造、精神の重要性というのは大塚さんにひかれたのだけれども、それは、まあ、課題として残

してきた（笑）。

しかし、ずっと通奏低音のように響いていて、上部構造との関連を考慮する現状分析やいまの社会的経済への道行きでは、そういう主体的視点が重要になってきている。

**福留** そのときは大内ゼミに入る儀式みたいなのはどういうかたちでやりました？ 面接がありました？

**粕谷** 大内さんの面接。一人ずつ面接で、呼ばれてね。

**福留** どのぐらいの時間ですか。

**粕谷** いや、わずかな時間、5分ぐらいかな。

**福留** その前にレポートとか論文とか、何かそういうものは。

**粕谷** 出しました。出して、それで呼ばれたのかな。「君の議論は理論的だから、鈴木鴻一郎さんのところへ行ったらどうだ」とまず言われた。

**福留** 何について書いたんですか。

**粕谷** 何だろうな。レポートを読んで、たぶんそういう印象をもたれたのだろうな。

**福留** 下部構造、上部構造なんていう問題をレポートに書いたんですか。

**粕谷** そう、それを止揚するというような論旨。もう一つは山田盛太郎さんもそうだけれども、農業は基底だと。つまり周辺を見ると、全構造がわかる。全構造を見るには周辺を見なければいけないという観念がいつのまにかあって、それでなぜ農業をやるかというときに、それを言った。レポートでは書かず、面接で言った。だから、先生の下で、日本資本主義の現状分析をやりたいと。

**萩原** 粕谷さん、途中で半量を入れるようでもことにすみませんが、基底と周辺というのは根本的に違いますよ。山田盛太郎さんの『分析』に出てくる基底というのは、明治初期の日本は農業就業人口が80%でしょう。その大半が零細な農業経営で、日本資本主義がその上にそびえ立っているという見方です。半封建的な農業経済の上に資本主義がそびえ立って



いるという話ですよ。だから、農業は周辺ではないですよ。

**福 留** 大内先生の理論から言えばそうですね。

**粕 谷** 曖昧な使い方、ご注意ありがとうございます。普通、各国資本主義の分析は、資本というのを主体に考える。山田さんの日本資本主義論も、大内さんの本でもそうだけれども、資本の運動とかかわらせて日本の農業を論じている。その資本主義の特質は、資本主義が苦手とする農業との関わり方の仕方にとくによく現れる。山田さんの基底というのを量的にはなく、日本資本主義の質を規定する基本的要素という意味で私は理解した。これはある意味で基底だけれども、周辺というか、底辺にもなっている。そこから、「苦手」という「外部」と「底辺・周辺」という概念を雑駁にダブらせていたのだね。

**福 留** 「鈴木鴻一郎さんのところに行ったらどうだ？」と言われて、どう答えたんですか。

**粕 谷** それで言ったのです。基底だとか周辺だとか、そこに本質が表れるという。だから、「限界」という言葉を使った。ぜひ限界のところの農業に立ち入って日本資本主義の分析をしたい。それで全体がよく見えるんじゃないかと。そうしたら、OKになった（笑）。

**川 上** ずいぶん難しい面接をやっているんだね。僕らのときは面接でそんなことをやられた記憶はないけれども。

**粕 谷** 全員ではなくて、何人かが呼ばれたんじゃないかな。ちょっとこいつはおかしいなと思ったのを呼んだのではないと思う。それで大内さんが確かめられて、「それならいいでしょう」ということになった。

**福 留** 僕の場合は1年下ですが、面接はなかったように記憶しています。希望者はレポートを出しなさいと掲示してあった。農業をやりたいのだけれども、まとまったことを何も知らないから、大島清さんが割と小さな本ですが、農業全般について上下2冊ぐらいでまとめたものがあった、それを読んだ。ともかく入りたかったから、農業協同組合か何かのことを大島さんのそれからまとめて、こんなことをやりたいというので出し

た記憶はあります。

**粕谷** 私は、農業についてはほとんど触れないで、資本主義の理論や何かを勉強したいと一番初めに出したので、呼ばれたのでしょうね。

**萩原** 粕谷さんは、そのころから悪い癖があったのですね（笑）。そういう方法論というか、内容から離れちゃってすぐに方法論とか分析視角の方に行ってしまう。

### 学部時代から中小企業論を研究テーマに

**萩原** 学部時代はそのくらいにして大学院時代に移りましょう。

**福留** それで中小企業論を専攻するというにどうして決ったんですか。

**粕谷** 農業は先生が先生だから、もうやる余地がないだろうと思って。安易だったのは農業と同じ論理構造、方法論でちょっと変えてやっけていくと解けるんじゃないかと思ったこと（笑）。しかし、違うんだよね。

**福留** しかし、当時から粕谷さんは論争癖があって、専修大学に中小企業論で中村秀一郎という人がいましたよね。それから東大の社研で氏原正治郎さんと高梨昌さん、信州大学に後で行った。あの人たちの論文をやっつけるのに一生懸命だったという気がしますね。

**萩原** 中村秀一郎さんの『中堅企業論』はだめなのですか。あの本の出現は、戦後の中小企業論史のなかで、画期的な転換点だったのではないかと思うのですが。

**粕谷** だけれど、それは大内理論からいえば位置づけが違う。かれは中堅企業論とか、…

**福留** 中工業論とかいう論点を出していて。

**粕谷** そのような企業論的な議論に対して、日本資本主義の構造との関連からの二重構造論というのを対置した。

**福留** 下層のほうが、景気のいいときはそう見えるけれども、少し景気が悪くなると下層が沈殿するんだという、そういう論理を展開していま

したよね。

**粕谷** だから、二重構造論から出発しながらも、シュンペーター、企業者論へ行ってしまった清成さんも論敵だった。

**萩原** 『経済学研究』に載せた論文は修士論文ですか。

**福留** あれは博士論文、博士課程で書いたもの。

**萩原** 博士課程の修了論文ですね。宇野理論の残影は、今の僕の頭の中にも大きく残っているのですが、宇野理論に非常な違和感を抱いた点が一つあるのです。僕が一橋から法政の大学院に移って助手になったころ、日本はドイツを抜いて世界第2位の経済大国になっていたのです。

向坂先生は、日本資本主義のダイナミックな発展力を講座派は全く見ていないと批判してきた。大内さんの日本経済論も、その点では講座派と大差ないなと感じていました。大内理論も、コミンテルンの全般的危機論と結論はかわらないのではないかと。第一次大戦を境にして、資本主義は社会主義への過渡期にすなわち崩壊期に入った。1920年代に相対的安定期があったが、1929年恐慌以降長期停滞と慢性不況の時代に入ってしまったというわけです。国家独占資本主義とインフレ政策で、余命を保ってきましたが、それも効果なく資本主義はまもなく臨終を迎えるという現状分析です。こんな非現実的な現状分析では、日本の高度成長など全く説明できない。

**粕谷** でも、萩原さんがさっき大内さんの『日本経済論』上下を読んで感動したと言ったけれども。

**萩原** 下巻は本当につまらなかつた。何も覚えていない。感動したのは上巻だけです。

**粕谷** いや、下巻は面白くないというのはわかる。真髓は上巻だよ。上巻で国家独占資本主義論をやっているのだけ？

**萩原** 国独資論をやっておられますね。

**粕谷** さっきは上巻の評価が高かったじゃない(笑)。

**萩原** 僕には、大内さんが山田盛太郎の講座派理論をこてんこてんにやっつけているところがおもしろかったです。「山田博士によれば」と慥

懃に書き出しておいて、博士はレイバーコストと賃金水準を混同されている、こんなインチキな経済学者が東大で経済学を教えておられると結ぶのですよ。日本の紡績女工の賃金が「インド以下の低賃金である」ことの証拠として、レイバーコストの比較をしている表が、ちゃんと『分析』の中にデータとして残っているわけです。噴飯物ですよ。

**粕谷** 日本資本主義論争だとか何か、そういう問題にどうけりをつけるかということもあったけれども、あの時点で大内さんが新しく押し出したのは国家独占資本主義論なのです。あるいは今でいう現代資本主義論。インフレというのが出てくるけれども、資本主義の骨髄である金本位制を抜いて管理通貨制にした。だから、資本主義は、資本主義の難問にも柔軟に対応できるようになったという理論仮説の提示は、大内さんの最大の業績だと思う。

ただ、少し勇み足をしたのは、これは萩原さんの言うとおりで、本の最後で、神武、岩戸の戦後日本の高度成長も、昭和36年か37年くらいか、日本経済にはそろそろ秋風が吹き始めたといってしまったのはちょっと早すぎたなという感じはしたのだけれども。

**福留** そこは大内先生の癖というか、『経済学体系』でもそうですが、最後のところは経済学から離れて、『日本経済論』は「秋風が吹く」ですけれども、「安定は崩れるであろう」とか、何かそういうシニカルな感情表現というか、必ずと言っていいぐらい、そこで終わるんですよ。だから、反資本主義感情というのが冷静な分析を鈍らせているのではないですか。途中の分析には良い効果があるにしても。

**川上** いや、僕に言わせると、そういう感覚は大事なんじゃないかという気がするのです。大事なだけれども、それをどう経済学の分析に具体化するかというときに、宇野さんは第1次大戦で資本主義の発展はおしまいというので、それから過渡期だとはっきり時代規定をやったわけです。その点について私は今でも正しいと思っています。ただ、彼がそう考えた理由の方はちょっと同意できないのですが、その規定そのものは正しいと

思っています。

しかし、それをやるときに大内さんの場合にはその前からの延長で、かたちで、形態で資本主義を分析するというくせが抜けていないのです。だから、国家独占資本主義というかたちでやる。そうすると、その後の紆余曲折みたいなものはうまく入らないことになってしまうのではないか。

そうではなくて、宇野さんが規定したように、これで資本主義の発展は終わりということで、その後は私流に言えばカタストロフィーの時代に入った。コミンテルンは全般的危機の時代というふうにして、この危機の中身の規定がないものだから、めちゃくちゃなことになってしまった。しかし、そういう大きい危機の時代に入ったということを踏まえながら、あとは具体的に分析していけば、もっといろいろ柔軟に、いや、そうじゃなくて、高度成長の局面も出てくると。出てきたら、出てきたのに応じたかたちで分析すればいいんだと思う。大内さんにはそれができないような理論構造だったのではないかと思います。

**粕谷** 両方あると思うのだけれども、萩原さんが言ったような、現状分析的には確かにその後、高度成長第2期というのがあるんです。それは上巻を書いたときに見抜けなかった。だから川上さんが言ったように、大きくこういう問題が出てくるけれども、それをどう処理していくかという処理のところの追究は弱くなっていたんじゃないかなと思うんです。

それは非常に難しいんで、だいたいマルクス派は、いつも景気予測をやって、「これで日本経済はおしまいだ」といった診断を下す。これは中村隆英さんにだいたいわれたのだけれども、「『これでおしまいだ。あとは停滞だ』と言うけれども、皆くつつがえっているじゃない」と（笑）。予想よりも皆よくなっている。しかし70年代を過ぎると、今度は予想よりもだいたい悪くなっている（笑）。

だから、川上さんがいうように、そういうのがあり得るといって、初めから方法的に許容度みたいなものをちゃんと置いておいて、しかし、今度はだいたひ構造転換をしたので、こういう意味で、より深刻じゃないかという

ことを言わないといけない。

### 大内・国家独占資本主義論の評価

**萩原** 僕は大内さんを、直接にも存じあげています。総評の調査部時代に、いろいろお世話になりました。しかしその頃から、大内さんの国家独占資本主義論にはついていけなかった。読んではいませんが、後に『国家独占資本主義・破綻の構造』という本を出されたとき、だいたい「破綻の構造」という本を書いた人はほとんどが自己破綻しているのです（笑）。大内さんは晩節を汚すことになると思いましたがね、こんな本を書いたらもうだめじゃないかと思った。

**川上** いや、あんまりそう言わないで。僕は「危機だ、危機だ」と言っばなしで40年やっているんだから（笑）。

**萩原** 川上さんの議論はもっと単純なのですよ。

**粕谷** 川上さんには膨張型危機もあるのです。

**萩原** 人間社会というのはいつも危機なのです。環境と経済はたえず変化していきますから。そうすると既存のシステムは必ず危機にさらされるのです。それをどうやって乗り越えていくかというのが人類の歴史です。だから、19世紀にも危機があったし、18世紀も危機の時代であった、危機はくり返しくり返しやってくるのです。

なぜかわかりませんが、川上さんは最近しきりにカタストロフィーという変な議論を言い出しはじめた。そもそもカタストロフというのはありえないのです。システムの危機は必ず克服され、その過程を通じて社会は進化していくのですから。

**粕谷** そこがスタンスの違いで、いままでは克服されるけれども、これからは、そうもいかないと、時期によって危機の様相が違うとか、そういう中長期的な違いがあるでしょう。

**萩原** 危機の様相は1回1回、全部違いますよ。

**粕谷** それは少し短期的過ぎるので、もう少し長期的に見ると、前の

ときの危機と違う深刻さがあるんじゃないかというところがあると思うんです。

**萩原** 危機と景気循環とは全然関係ないのです。危機というのは、例えば少子化と高齢化によって日本の社会保障財政は破綻寸前にきていますので、このまま推移していったら社会保障財政は崩壊する（カタストロフに陥る）かもしれません。しかしこの社会保障財政の危機は、崩壊する前にシステム・チェンジによって克服されると思います。主たる財源を付加価値税に切りかえるか、それともインフレで解決するかは未定ですが、いずれかの方法で解決されていくでしょう。人間には、「災いを転じて福となす」知恵が身につけているのです。

**粕谷** 楽観派なのだよ。一番楽観的なのは新古典派だとかだけれど、つまり全部、均衡を前提とするから、危機だとか何とかというのは均衡からの一時的なぶれですますわけです。

**萩原** いや、新古典派の理論とはまったく違いますよ。粕谷さん、釈迦に説法で申しわけありませんが、新古典派経済学と制度派の進化経済学は、経済学の両極にあるのです。古典派はもともと短期、中期、長期というように期間を分けて経済分析をおこなったり、経済を歴史的に見ることはしないのです。古典派はすべての経済現象を、長期で観察しているのです。だから、たとえば資本利潤率は“いずれは”（in the long run）はゼロになってしまうわけです。プロフィットがなくなってしまう社会になるには何年かかるのか、たぶん500年とか1000年ぐらいはかかるかもしれない、という風に考えているわけです。

しかし、そういうstationary state（定常状態）は必ずやってくるのだから、そこにいたるプロセスと均衡状態を理論化しろということになります。だから、短期と長期を分けない、時間軸のない経済学というのが古典派経済学なのです。定常状態に向かう途中に、progressiveな時代とかdecliningな時代とかいろいろな時代があるけれども、長期的には定常状態に落ち着く。

**粕谷** 長期には定常状態、つまり、やはり均衡状態なので、いくら不均衡があっても、いずれ均衡に戻る、だから心配するな、ということでしょう。しかし、不均衡動学というもある。また、超長期には、ケインズも言ったように、死だということになる。

**萩原** 粕谷さんの予想では、人間社会はバースト（破裂）してしまうのですか？ バーストあるいはカタストロフィーに陥って、永遠の地獄がやってくる。ダンテの『神曲』みたいですね。詩的だなあ…。

**粕谷** 少なくとも、その蓋然性は高いと判断する。宇宙的タイムスパンではもちろん、人類史でも、中長期ではね。

#### 馬場理論の影響を受ける しかし…

**萩原** 人間の知恵を信じないわけですね？ それでは馬場さんと同じではないですか。

馬場さんと同じで、人間社会の未来は何も信じられない。人間社会の歴史はカタストロフで終わるのですか。

**粕谷** 違う。Yes and No.ですね。地球の歴史などという宇宙論的長期では多分Yesでしょう。しかし、いまはそんな超長期の話をしているのではない。人類の歴史の中で、資本主義が主導するようになって以降、単なる景気循環を超える構造転換くらいの中長期の話をしている。その場合は、Yes and No.ですね。

**萩原** 人間は社会のどんな構造的な危機でも、システミック・クライシスでも解決していきますよ。

**粕谷** それはそういうオプティミストなんです。一番のペスティミストは、馬場さんのように、資本主義の発展は「過剰富裕化社会」を導き、「社会原則」を摩滅させて、人類社会はおしまいになるという。その蓋然性はかなり高いと私も思う。馬場さんの『教育危機の経済学』のそのところからはだいぶ馬場さんと同じところもある。それに対して、萩原さんは自然と何らかの解決策が出てきて解決されるんじゃないかという。



萩原 僕は今西錦司の影響を受けた進化論者なのです。

粕谷 それを進化論と言うかもしれないけれども。

萩原 カタストロフというのはあり得ないと思います。人間社会は絶えず進化していくのですよ。

川上 君の考えは、一つの宗教なのだ。それは具体的な分析から出ている話では全然ないんだよ。ただ、私がカタストロフというのは、システムが元の健全な状態にもどれない、ということで、歴史がそれで終りという意味ではない。しかし、資本主義が終わりではないが、元へもどれずのたうつことになる。それを何か解決して新たなレジームへ移行すると理解するわけにはいかない。

福留 粕谷さんの議論は、馬場さんの影響がかなり大きいと思うので、その点をもう少し議論してほしいですね。粕谷さんの資料だと、馬場宏二の「過剰富裕化論」と「悲しき唯物史観論」の現在の意味は高まりこそすれ、少しも減じてはいないという認識ですよ。

それに対して、萩原さんはいろいろなかたちで克服できるんだという考え方ですよ。そこはぜひもう少し詰めてほしい。

粕谷 萩原さんの議論は進化論のひとつとってよいかもしれないけれど、そのプロセスが重要だと思う。今回の構造的危機は、今までと違うどういう性格の危機で、カタストロフィーとなる蓋然性がどの程度高く、どのようにしたらそれを克服できる可能性があるのか、それらがどう用意されているのか、いないのか、その探求が重要だ。

はじめから、いつでも自ずと解決されると前提できない。逆に、馬場さんは、『唯物史観』と「大衆責任論」で、そこからシニシズムになる、ニヒルになる。しかし、まさに崩壊の蓋然性と克服の蓋然性をそのせめぎ合いの様態を分析する現状分析が必要なのだ。

福留 いわゆる宇野学派の中でいうと、粕谷さんや私などの世代は馬場さんの考え方に圧倒されているところがあるのです。しかし、もう少し下、山口重克さんなどのお弟子さんの世代だと、馬場さんの説について割

に冷淡なのですよ。彼らには仲間うちで議論するだけでなく、きちんと書いて公表してほしいのですが。

**萩原** 僕も、ある時期以降の馬場さんの議論には、まったく興味がありません。馬場さんには申しわけありませんが、ほとんど無視してきました。

**福留** 無視というのではなく、彼らは馬場説について議論はしているのですよ。一生懸命議論していて、それで馬場さんの過剰富裕化論については批判的なのです。

**粕谷** それは馬場さんもどこかで言っていたけれども、一つは若い世代がそういう問題意識、つまり一定の時期区分をして、危機の時代になるとか、問題を全体構造的な問題としてとらえることをしなくなる(?)。議論の枠組みがすでに想定されていて、その上で問題を設定するから、非常に小さい問題になって、実証的な問題になっている。逆に言えば、一定の仕方では実証できないようなことは考慮の外に追い出してしまふ。ちょっと言い過ぎかな。

それから宇野学派も、原理論と段階論の違いといった方法論の議論はよくするけれども、現状分析で宇野さんが言った「無理」が具体的にどのように展開するのか、というようなことに対する意識が低いのだと思うんです。だから、現状分析はほとんどやられていないのではないかと思うんです。原理論と段階論の話ばかりしている。

この前、萩原さんと議論したときに出てきた問題だけれど、馬場さんのいう形態に包みきれない問題を一番はっきり出したのは世界農業恐慌だと。そういう問題、形態の中に取り込めない問題、それをどこでどう調整するのかという、そういう問題意識がなくなっている。馬場さんはそれをものすごくラディカルに単純化して、社会原則と市場経済という具合に二分法ではっきりさせて、こちらが勝てば、こちら摩滅するんだという。

**萩原** 馬場さんの議論はキリスト教的な終末論に近いと思いますね。神を信じなくなって物欲にとらわれ、墮落してエデンの園を追われた人間

には、かならず最後の審判が下される。人類は、“歴史の終わり”（the end of history）に近づいている。人類は恐竜のように消えてしまうかどうかかわからないけれども、たぶん小さな生物として地球上に残るかもしれない。しかし、今や人類の歴史はそういうところに来ている。

他方、マルクスやフランシス・フクヤマなどのヘーゲリアンによれば、歴史は必然の王国から自由の王国に移ってやはり終わりを迎える。

**粕 谷** そう。それで、オプティミストは人類は今まで生き延びてきたし、いろいろな困難を解決したから大丈夫だというのだけれども、僕から見ると両方とも極端だ。何を規準にしてオプティミスティックになり、ペシメスティックになるのか。何が規準なのか。

そうすると僕は、そこで生きている普通の人の命と暮らしのありよう、現代の生活を規準にして、これがどう摩滅してくるのか。摩滅しっぱなしではなく、必ずサバイバル・バネが利いてくる。これが社会運動だと思うのだけれども、社会運動が起こってくるわけです。そして、これをどうしたらいいかという政策論ともつなげることができるようになる。

しかし、馬場さんの場合にはそれはほとんどやらないんです。

**福 留** どう対処するかという話がない、という訳ですか。

**粕 谷** しない。この前、久しぶりに生活経済研究所が出している雑誌の巻頭言のところで、大きな政府の勧めというのがあった。

**福 留** 「重税国家のすすめ」ですね。

**粕 谷** 馬場さんが送ってきてくれたときに久しぶりの政策論だと書いてあった。本当に久しぶりだなと思った。僕が馬場さんに一番近づいたのは『教育危機の経済学』です。そこで、いかに市場経済が社会原則を摩滅させて、子供、家族などを分解して、新しく社会を担う人材をいかにつづしているのか、論じている。これが本当の日本資本主義の危機なんだと論じている。

そこで、日本の経済学はと言ったか、経済学者諸君はと言ったか、市場経済の外に出る問題、言葉は違うかもしれないけれども、社会科学がそれ

に達するためには下部構造が上部構造を規定するなどというたぐいのディメンションは捨てなければいけない、超えなければいけない、その上の次元に達しなければならぬという。だから、見ている問題が私と同じかなと思った。しかし、そこで馬場さんは控えてしまうんです。

僕はむしろ、その後を継ごうと思ったんです。それが僕の後の展開で、そのためには準備段階が馬場さんとかなり違ってこざるを得ないけれども、私の出発点の要点は馬場さんと非常に近いところがある。

**萩原** 『教育危機の経済学』は私も読みましたが、富裕化論の方は面白かったけれども、この本はだめだなと思った。明治・大正・昭和の労働者の家族の歴史をちゃんと調べればすぐわかることですよ。どれだけ労働者の家庭が豊かになってきたか。豊かになった大きな理由は、洗濯機や冷蔵庫が普及したおかげで女性が家庭から出て働けるようになったからなのです。だから、高度成長期あたりから飛躍的に豊かになっていったのです。

特に労働者の家庭が豊かになった。経済的に豊かになっただけではありません。女性が自立できる根拠や基盤も整ったし、子供を高校や大学に進学させる家庭の基盤もできてきた。なぜかというとは既婚女性が働けるようになったからなのです。

一番大きいのは洗濯機の普及です。それから冷蔵庫の普及で、毎日買い物に行かなければならないという状況がなくなってきたわけです。女性にとっては、時間の経済がもっとも大事なのです。

そういう状況の変化を、家族の崩壊とか家族の危機とだけとらえるのは、あまりにも一面的である。確かに共働き家庭が増えてくると、いろいろ夫婦の不和も増えてくるし、生む子供の数も少なくなっていわゆる少子化の傾向がでてきます。しかし、明るい面を全然見ないのは変な議論ですよ。僕は、危機論者というのが本当に嫌いなのは、ちゃんと事実を見ないで、イデオロギーばかりふりまわす人が多いからです。(笑)。

**粕谷** 子供はテープレコーダー付きプラモデルになったと。

**萩原** どうして冷蔵庫や洗濯機に興味を持たないのですか。

**粕谷** いや、それは評価する視点が重要なわけで、どういう枠組みでいうのかというのが大事。

**萩原** そんなことを言わないで、まず率直に洗濯機が普及して、どれだけ家庭生活に変化が起こったか見てほしい。

**粕谷** 物的に豊かになったというのは事実だから、そっちの面と。

**萩原** 豊かというのは経済面だけではないですよ。家庭生活が豊かになったのです。

**粕谷** しかし、その結果として、他面では家族の崩壊や、馬場さんの言葉でいうと仲間と家族の崩壊と、もう一つあった、自然との共生の危機。そういう面もありますね。危機の蓋然性と克服の蓋然性の両面があるのに、馬場さんは後者を見ないので、おしまいだという。逆に、前者を見ないではじめから、いつでも危機は克服されてきたし、これからも克服されると前提するのが超楽観的進化論ですね。私は、危機の蓋然性と克服の可能性の両者を見るゆえに、とくに今回の危機の蓋然性を意識するゆえに、これを克服する仕方を懸命に探そうとしている。例え未だ萌芽状態であってもあちこち探した。そして辿り着いたのが新しい社会運動、とくに社会的経済ですね。

**萩原** 経済成長には両側面があって、成長で傷んだ社会も修復可能だというのが粕谷さんの議論じゃないのですか。僕は、粕谷さんは口では両面を見ているとっていますが、本当は見えていないと思う（笑）。暗い面、ダークサイドしか見ていないのですよ。だから、家族が崩壊してしまったといった極端な議論にすぐに短絡してしまう。

### マルクス主義からの離脱

**萩原** ここで柏井さんから、粕谷さんとの出会いについて、お話をさせていただきたいですね。粕谷さんは最近、生協や労働者協同組合や新しくできつつあるNPOなどに、一生懸命取り組んでおられます。実践はどれくらいやっているかは知りませんが（笑）。

粕谷 いろいろフィールド・ワークはしたけれど、実践はまだ（笑）。

萩原 マルクス経済学を研究していた人は、むかしは労働組合運動に強い関心を示していましたが、最近は見向きもしなくなりました。労働組合運動に幻滅を感じて、ほとんど無視している。

マルクス主義者が労働組合運動に興味を失ったのは、ある意味では必然だとわたくしは思っています。なぜかという、私は実は博士課程に入ったときに、テーマをアメリカ制度学派の研究に変え、アメリカ制度学派の創始者の一人であるコモنزの理論とアメリカ労働史の文献を読みあさりしました。アメリカのアカデミズムには、ウィスコンシン学派という大きい学派があり、今日でも歴史学の分野で影響力を保持しています。

労働運動の理論家にパールマンという、コモنزが一番かわいがっていた教え子がいました。20世紀初頭に東欧からアメリカに亡命したユダヤ人です。パールマンはすごく面白いことを言っているのです。アメリカの労働運動は、最初は階級的労働運動として始まった。Knights of Labor（労働騎士団）の時代です。ところが20年ぐらいて、その階級的労働運動はほぼ消えていき、それに代わってゴンパースが指導する職業別組合運動が台頭してきて、アメリカ労働総同盟が形成される。ですからアメリカ労働運動史は、階級的労働運動 class-conscious unionism から職業別組合運動 job-conscious unionism (craft unionism) へという歴史をたどった。

パールマンが、アメリカ労働史をどうやって理論化したかという、労働組合というのは資本主義社会のなかで、労働者が雇用保障を確立するためにつくった自衛組織だということです。ですからパールマンによれば、労働組合は、資本主義経済を補完する熟練労働者の自生的組織以外の何物でもないのです。

私が昔々属していた社会主義協会という団体は、階級的労働運動を掲げる団体だったのです。この団体は、三池闘争がらみで年中職場闘争論を宣伝していました。私は階級的労働運動には批判的でしたが、職場闘争論には共鳴していました。パールマン理論によれば、職業別労働組合は、職場

を労働者がきちんとコントロールできる点によさがある。そこにパールマン理論と協会派の理論は共通点をもっていると僕は思ったのです。

しかし、階級的労働運動論の方はナンセンスだというのが僕の意見でした。粕谷さんは階級的労働運動に期待して挫折してしまいました。マルクス経済学者だったら当然経験する挫折です。僕は労働組合論については、マルクス主義から最初から離脱してしまっていた。要するに階級的労働運動に期待がもてなくなったから、これからは生協や協同組合などの社会的企業に期待するというのは、挫折したまじめなマルクス主義者がたどるナチュラル・コースではないでしょうか。

**粕井** その前に法政の労働運動研究集団の時期がありますね。

**粕谷** そう。その前にずっと労働運動研究集団のほうに近づいていったというのは、法政に入って、少し前に法政に入った馬渡さんや杉浦さんに誘われて、川上忠雄という人物に会った。階級的労働運動はすたれたけれども、それを再生させるという。じゃあ、どう考えて、どうやっていくのかということに非常に興味を持ったんです。

ところが僕がそういう実践運動に近づいていくというか、そういう理論に近づいていく時期は、たいていその理論は挫折したり、転換、見直しを迫られる、あるいは迫られている。たとえば大内ゼミに入ったときは安保ブントの見直しという時期だし、戦後世界研究も川上さんたちが掲げていた、そういう運動路線が一定の行き詰まりで転換を考える。

階級的労働運動の再生も、これを追究しなければいけないというのでひかれていったのだけれども、事実上やがて見直しをするようになってくる。だいたいそういうふうに見直しになると私の感覚と合ってくる。だから、その時分、川上さん自身から聞いたほうがいいのかもしれないけれども、どう考えていたのか。

僕は割合、そういう戦闘的なラディカルな人に対しては少し気後れするのです。しかし、それを知りたい、こなしたい、何かあるんじゃないかとは思った。会ったら、川上さんの場合には包容力があるというか、僕がお

そるおそるいろいろなことを言っても、それを排斥しないのです。そのまま受け取ってくれる。

**萩原** もう少し具体的に話してくださいよ。あのころは総評が解体に向かっていたわけですよね。労働戦線の統一で、IMF-JCを中心とした金属関係の組合が主導権を取って、労働運動を再編成していくという時期でしょう。

**川上** そういう大きな話ではないんです。実際、我々が直面した問題はどうかということだと、70年安保全共闘運動が行き詰っていく。そのときにいったいどういうふうに関与するかということのを新左翼で党派をつかった連中は皆、必死になって考えたわけです。それで実際に僕なんか小さい党派をつかってやろうしたのだけれども、はっきり誰が見ても74年の国鉄の順法闘争、それから75年のスト権スト、これでだいたい労働運動は展望を失った。そのなかでなおかつ労働者階級をベースに、いったいどう運動を立て直そうかということで、前に組織をつかったときの綱領なり何なりを、もういっぺん見直さなければいけないということになったんです。

それですぐにそんなことはできないわけで、研究会で検討するというのを始めた。その最初が戦後世界研究会というので、世界全体を獲得しようとして大風呂敷を広げて（笑）、7、8冊の本をいっぺんに作るというのをやったんです。実際は2冊しかできなかったのだけれども。

**福留** 2冊というのは『現代日本帝国主義』と…

**川上** 『現代日本帝国主義』と『膨張する社会主義・ソ連』。

**福留** 中山弘正さんですね。現代評論社でしたね。

**川上** その二つができたんです。その一環に彼を誘い入れたと。それでさっき彼が言ったように考え直そうというのがあったから柔軟さはあったわけで、何を言っても大丈夫だということにはなっていた（笑）。

**粕谷** 日本経済論の講義を始めてからちょうど5年くらいたったころ、日高さんと平田さんと共著で『経済学』という通信教育の教科書を出した。そこに、これまでの講義を纏めて、現状分析としての日本経済論と



いうのを書いた。だいたいその論旨を研究会で展開したのです。どこかいろいろ注文がつくかなと思っていたら、だいたいそのまま受容してくれるのです。ああ、これは柔軟だなと思って、それでその延長上に『現代日本帝国主義』、あれも川上さんからほとんど注文がなかった。勝手に書いた(笑)。

**川 上** いや、注文を出すだけの力がなかったのかもしれないけれども、お互いに共通していたのは、方法論でかなり違うところがあるわけです。あっても、方法論は要するに手段で、現状分析をやることが一番の目標だったわけで、そういう違いがあっても一緒にできたのではないかと思うんです。

**萩 原** そういう意味では粕谷さんは、大内ゼミのゼミ生のときから新左翼だったのだ。

**川 上** 親新左翼だった(笑)。プロ新左翼だった。プロ共産党ではなかったという。

**粕 谷** それは、大内ゼミに入って、宇野理論に入門したときからのことです。日本資本主義、農業問題もそうだけれども、それらはみんなアンチ講座派だから、経済学入門とともにアンチ講座派になった。

**川 上** 戦後世界研究会がほとんどまともに成果がまとまらないで、その後始めたのが自主管理研究会という研究会です。メンバーは若干替わってきて、その自主管理研究会というのはそのときは、作品は『社会観の選択』を出した。その端書を読み返してみると、皆、経歴の違ったのが集まっているわけです。しかし、自主管理社会が目標だという点では皆、緩やかな共通項があってやったんです。

そのころから研究会をやっている、粕谷君、それから亡くなったけれども杉浦君、これが新しい問題意識を持って、皆に投げかけるというのが非常にはっきり始まっていた。僕は頭にいたけれども、そんなに気の利いたことは必ずしもできなかったのですが、そういうことで自主管理研究会をやった。

その最中に彼は割に早い時期に、今から見ると日高還暦記念の論文集に書いた。それで彼はかなり考え方を出したのですね。それは哲学を、ほとんど、あれは1人でやったのでしょうか？ 誰か有力なあれがあってではなくて。

**粕谷** 哲学といっても2段階あって、社会学から入って行ってやった。哲学、ポストモダンというのはもう少し後からなのです。本格的にやりだしたのは『社会観の選択』の前ですよ。そのときには、自主管理研究会でも何冊かは川上さんも一緒に読んでくれたと思うんです。

**川上** それはそう。ただ、現代思想をやっているときには、放っておくと粕谷君はどこへ行くかわからない。それを必死にどこかへ飛んでいかないようにするというのが僕の役割だった。

**粕谷** 経済学から離れて、だから、経済学部でそれをよく寛容に見てくれたなと感謝しているのだけれども。

**福留** 僕も何のときかうろ覚えですが、粕谷さんの自宅に行って、そういう現代思想関係の本がずらっと並んでいるのにびっくりしました。「粕谷さん、今こんなことをやっているのか」と思った。日本経済論の担当で日本経済の現状分析を中心にやっているんだろうと思っていたので、驚いた。

**萩原** だから、粕谷さんは大学の講義の点ではあまりいい先生ではなかったんですよ（笑）。担当の日本経済論を、ちゃんと教えていないのだから。ひどい授業だったと思いますよ。

**川上** 日本経済論ではどういう先生だったかは保証の限りではないけれども、そのときに見直しをやりとういので、哲学までさかのぼってやったというのはたいへんなものだと思います。

**福留** 杉浦さんもそうですね。哲学への入り方なんかは違いますが、そこまで行ったというのは杉浦さんと粕谷さんですよ。

**川上** いや、これはすごいものだと思います。私なんかは結局、いまだにマルクスをもういっぺん見直さなければいけない、洗い直さなければ

いけないと思っているけれども、『社会観の選択』をやったときに彼はもう洗い直して、基本的にこれだということまで行った。こちらはそこまで行かなくて、マルクスの問い直しの一步、一番最初のところをやっとやれたというぐらいで終わってしまったんです。だから、いまだに課題は残っていて、そのへんをうろうろするということになったわけです。

### 全共闘運動とのかかわり

**福 留** 少し時期はさかのぼりますが、全共闘のころのことにちょっと触れたい。先ほど言いましたが、粕谷さんは修士論文に3年かけましたから、博士課程は一緒になるのです。博士課程の3年のとき、68年の6月15日、医学部の全学闘争委員会、彼らが約30人で安田講堂を占拠してしまったのですよね。

それに対して大河内一男総長が機動隊を導入して、それで一挙に抗議行動が広がって、経済の大学院は自治会でどうするかというのを議論して、結局、全共闘に自治会ごとに入ったんです。だから、すべて自治会で議論してやっていたから、そんなに過激なことはしないし、粕谷さんの表現だと後ろからついていく感じで。

**粕 谷** ただ、応用経済はそういう感じだったけれども、理論や歴史の中には一番フロント（前線）に出ていったのがいたでしょう？

**福 留** いたのです。それは大内先生が『埋火』の中に書いていますが、鈴木鴻一郎先生のゼミと経済史のゼミが割と強かったんですね。鈴木鴻一郎先生のゼミは岩田弘さんが実際に加わって、安田講堂の中で議論しているのに出くわしたことがあります。それから経済史はフロント系が強かったんです。

**粕 谷** 日本経済史。

**福 留** 日本経済史ですよ。今は東京経済大学の理事長をしている村上勝彦君や調査研究所を運営している原澤謹吾君あたりがフロントの代表格でしたね。



福留久大氏

**粕谷** それから藤沢さん。  
これはフロント系だ。

**福留** だから、フロント系は小さいけれどもしっかりした党派として議論しながら行動しているのです。そういうフロント系と岩田さんの率いるグループが、自治会のいわば論客で、我々は後からくっついていく構造

でした。

**萩原** 粕谷さんはどう受け取っていたのですか、医学部の処分問題を。あれは間違った処分ですよ。処分された粒良君というのは、僕と出身高校が同じなのです。佐世保に行っていて、アリバイがちゃんとあったにもかかわらずストライキで処分された。

**福留** 青医連運動のオルグに行っていたのですよね。オルグに行っていて不在だったのに処分されてしまった。

**萩原** しかしあの東大闘争全体は、さっきからいっているように便乗した新左翼セクトのほとんどが踊り狂ったドンチャン騒ぎでしょう。意味があったのは医学部の処分問題だけです。医学部というところは徒弟制なので、非常に封建的な体質があった。

**粕谷** あと文学部だよ。

**萩原** もう一つ、日大の管理体制のひどさですよ。学生がキャンパスに入るときに、大学が一人ひとりを学生証でチェックしていたわけでしょう。そういう意味では全共闘運動の大筋は、民主化闘争だったと思うのだけれども。あとはほとんど有象無象が安田講堂を利用して、党派闘争を展開したというだけでしょう。

**粕谷** しかし、思想的にはやはり自己否定、大学否定というのが出てきて。

**萩原** 全然理解できませんね。妄想としか思えない(笑)。自己否定とか、何で処分されたほうが自己否定なんて言わなければいけないのですか。

**粕谷** 萩原さんから見ると皆、妄想なんじゃないか(笑)。戦後民主主義の限界とか、それで丸山真男批判なども出たでしょう？ つまり、ブントの運動、安保のときもそういう要素があるとさっきも言ったけれども、目に見えぬ管理体制みたいところに我々学生もそれぞれの役割の中ではまっていたというか、いて、気がつかないんです。それがそういう事件というか、最もわかりいい事件で、古い大学の体質が出てきて、それを突破口にそれに対する否定というのはどんどん深まるんです。いろいろなところにそれが行くわけです。

そうすると、大きくいえば、自分というのは何か、あるいは今の体制は何だとか、そういうところまでいく議論、それをフロンティア、最先端でやっているわけです。そうすると、「ああ、確かにそうだろう」と、認識枠組みの相対化が螺旋的に進行する。杉浦氏もそうだろうと思うけれども。

**萩原** それはめちゃくちゃインテリっぽい議論だね(笑)。インテリ臭くてついていけませんよ。

**粕谷** たしかに、それはインテリの議論かもしれない。労働者や農民や漁民か何かの具体的な闘争とは違う。それがあの高度成長の時期、60年代末、これから70年の石油危機を皮切りに進行する危機の時代を予兆するように、当たり前だと思っていた戦後民主主義、さらには西欧近代を疑う思想が出てきている。それはまさに文学者の運動かもしれないけれども、大学の中でそういうのに共鳴板があった。

それでそういう議論を聞きながら、そして、新たな認識枠組みの探求や創造にわくわくしながらも、同時に、見えない格子ではないけれども、日常の、細かい、既成の固定観念や規則にとらわれ、思う存分発散できない。その中には、たしかに、不本意な修論を書かなければいけない、不本意なドクター論文を書かなければいけないとかも入っていたかもしれない。しかし、それらが、ワーッと飛んでしまったわけです。ものすごい開放感で

すよ。

川 上 それは東大でも起こったし、日大でも起こったけれども、単に日本だけではなくて、68年のフランスで起こっている、ヨーロッパで起こっている。

粕 谷 アメリカでも起こっている。

川 上 というのは、結局、戦後の米ソの体制で安定して成長したという、それ全体を告発するような、精神構造ではなくて、気分がだんだん生まれていて、それが爆発したわけでしょうね。だから、萩原君は全然わからないと言うけれども（笑）。

萩 原 今の川上さんの話にも全然ついていけません（笑）。僕は労働運動史を専門にしていたから、運動主体のイデオロギーには最大の注意を払っています。ベトナム戦争のさなかにあったアメリカの若者にとって、ベトナム行きは深刻な問題ですよ。徴兵制なのですから。登録制ではないのです。それでベトナムに60万人の大部隊が派遣されていった。かれらはジャングルで戦っているわけです。よほど戦争目的に対する強い共鳴がなければ、アメリカはこの戦争で負けますね。

ところで日本には何があったのですか。人間疎外とか格子なき牢獄といったインテリっぽい空疎な議論を聞いていると、僕はアメリカの学生運動には合掌したくなりますが、日本の全共闘運動への共鳴はゼロです。

川 上 いや、日本にだってベトナム戦争はあったわけで。

萩 原 いや、日本人は1人もベトナム戦争には参加していませんよ。

川 上 実際にそこへものすごくいろいろなものを送って儲けていたわけです。

萩 原 それでは間接的もいいところですよ。

粕 谷 ベ平連は一定の広がりを持った。

萩 原 それは一種の連帯運動ですよ。アメリカの反戦運動に対する連帯運動として、そこは理解できます。

粕 谷 東大闘争だって医学部で処分された人に連帯する運動なんだよ

(笑)。

**福留** 連帯運動という色彩は基本的にはありますよ。それが割と強く、そして全共闘で確か東大の全学部の過半数の自治会を獲得した時点があるんです。それで僕はこれで収束してくれればいいなと思っていたら、党派が壊してしまったという印象を持っています。革マルや何かが。

**粕谷** 内ゲバでね。

**福留** 革マル、中核、そういうところがやはり収束を嫌ったんでしょうか。それで過激になってきたのに対して、民青が非常に反発して強く出てきましたね。

**萩原** 私はノンセクトの全共闘運動には一種の社会運動的な側面があったと思います。「医学部の処分はけしからん」とか、「日大の管理体制はけしからん」とかいう面での運動です。ところが、いわゆるセクトはプロ集団だから、あれを利用して徹底的に党派の勢力を広げるといっただけでしょ？

**福留** だから、後半になると、経済の大学院なんかは全共闘のほうになっているから、全共闘が負けると困るという感じで民青と対立する構造になったように思いましたね。

**粕谷** 内ゲバが出てきたとき、この先、どうなるかな。このまま続けていけるのかな。それがえらく不安だった。内ゲバをやらずに、もっと長期的なスパンを考え、日常性をも大事にしながらやれば、いろいろなことができるのじゃないか、と思ったりもした。

**萩原** 経済学研究科の学生自治会はそれこそ親左翼、新しい左翼ではなくて親左翼で、どちらかというとなンセクトの側についた。そうすると、もしもマルクス経済学を専攻している院生が多かったとすると、本来マルクス主義者は革命闘争に入っていかなければならないのだから、セクトの側につくのが自然ですよ。民青、共産党には、そういう連中が多かったのではないですか。

**粕谷** 民青の連中は経済の自治会に出てこなくなりました。

**福留** だんだん出てこなくなりましたね。民青は民青として大学全体でまとまることになる。川上徹なんかが学内に乗り込んできて指導していました。構内で彼をみかけたことがあります。

**萩原** 私は当時、社会党系の社会主義青年同盟というのに参加していました。しかし、向坂先生なんかは、東大闘争などには参加するな、むしろ成田の農民支援のために援農活動をやれといわれていた。

### 法政大学の助手に採用される

**粕谷** だから、新左翼的なラディカリズムで反大学、大学否定というか、そういうものに洗礼を受けながら、危うさを感じていた。

そのような問題に闘争が深まる前、いわば無風状態の夏休みには就職論文を書くような余裕があった。後になってくるとそんなものを書くどころではなくなってくる。

**萩原** それは1969年の夏？

**粕谷** 68年の夏に就職論文を書いてしまったんです。夏休み中か、秋のはじめ頃か、東北大のH.Oさんから、「東北、どうだ？」というんで出ました。そのうち法政の募集があった。締め切りも大体同じ頃だったかな。

それでT.Oさんと一緒に、法政へ出してみよう。しかし、同じ学部では競合するから、それぞれ違う学部へ出そうということにした。しかし、東北のほうは審査が長引いていて怪しくなってきた。そのうち、法政のほうが多く決まったのです。また、もちろん東京のほうがいい。そこで、法政の経済に決めた。

こうして、法政に特別助手として職を得ましたが、闘争がそれからだんだん激しくなって、4月になっても大学院の籍を抜くわけにはいかなくて、4月以降、学生身分と助手身分の二重身分。

**福留** 69年の3月で卒業しなかったわけですか。

**粕谷** 卒業式も入学式もなかった。経済大学院は7月以来、ストライ



キ中。

**福留** ないけれども、大学院のほうも籍を置いておいたんですか。

**粕谷** 置いておいた。

**福留** 東大の大学院と法政の助手を一緒にやっていたわけですか。

**粕谷** そう。それとは直接関係はないけれど、秋の採用の際、法政の経済学部の教授会で、ストライキ中なのに、博士課程に3年在籍という条件は満たしているのか、問題になったらしい。そこで、ストライキ中も在籍と認めるのか、どうなのだということを東大の経済学部のほうへ確かめたらしいんです。東大の経済学部では前例にしたがって認めた。ああいう異常な事態だから、経営コースのほうでそういうのを認めたという。この前例に倣ったらしい。

**福留** その前にたとえば星野中さんなんか、同志社の助手をしながら東大の大学院にいましたし、法政の社会学部の助手をしていた、安保哲夫さんもそうでした。社会学部の助手をしながら、東大の大学院に行っていましたから、例はある。

**粕谷** 同じでしょう。法政でも一般助手だけれども。

**萩原** 僕は一般助手で、一橋の大学院と法政の大学院と両方に籍があったのです。

**川上** 僕は法政の大学院を終わったところ。

**粕谷** それで、まだ自主ゼミか何かをやっていて、それに加わっていた。けれども自然とだんだん足が遠くなって、また、法政のほうもいろいろ騒動があって、杉浦さんに秋になって授業再開するから、経済政策論だったか、出てきてくれと言われた。

**萩原** 粕谷さん、特別助手になったのは68年？

**福留** 69年の4月。

**萩原** 採用は68年に決まっていたということね。

**粕谷** そう。

**萩原** その69年の例の年初の機動隊との攻防戦、あのとき、安田講堂

の中にいたんですか。

**粕谷** いや、その前の日ぐらいまでいたけれども、最年長者は優遇してくれて出されて、勢いのいいやつが残った。えらく確信的なやつが残って、こちらは猶予された（笑）。

周りから機動隊にいろいろやられているところを、皆であっち行ったりこっち行ったりしていましたね。

**萩原** それでその後、挫折していくわけですね。

**粕谷** いや、若い下の連中はかなりずっとがんばっていた。それから、また大学院改革か何かでストライキをやったり、相当長い間、大学院問題は経済学部の教授会をてこずらせたんじゃないか。

**福留** 後の人たちがたいへんだったみたいですね。

**粕谷** それでついに5年制にして修士論文制度をなくして、ドクター一本にしてしまった。

**川上** 階級的労働運動の再生という前の話に戻して、一つ大事なことを落としているのは労働運動研究者集団です。これは私がキャップで研究会をやったというのとは違って、行き詰まりを打開するという模索の中で少し広い人に呼びかけた。実際、そういうのをやろうということを考えたのは私だったのだけれども、私だけではとてもできないので、東大社研の戸塚を口説き落として、彼と私と人脈でいろいろ人を集めた。だから、東大社研を中心にした労働問題研究者と宇野系統の経済学者が集まってやったんです。

そして、階級的労働運動の再生と、職場闘争から何とかしようというあれだったのだけれども、実際にはなかなか応援しようにも相手のほうが、やっているほうが、そういうのでできるというふうになかなかならないで、倒産争議の全金南大阪の運動の支援に駆けつける。倒産争議でバリケードをやっている中へ入り込んで、泊り込んでいろいろなことをやってきましたが、あそこで工場の生産過程なんていうのも初めて現場を見て、勉強にはなった。

しかし、それぐらいのもので、後は労働運動研究者集団も結局、労働者とはいったい何なのか。そういうことを問い直さなければいけないという話になって、そういう問題提起を何度かやったのだけれども、労働運動研究者がちっともそれにこたえないということで立ち行かなくなっていった。

**萩原** 僕も最初の頃は研究会に出ていたのですが、すぐにやめてしまいました。それ以前に東大社研で月1回ぐらい、氏原さんを囲んで研究会をやっていた。労働調査論研究会から始まって労働問題研究会と長く続いた研究会です。氏原さんが社研を定年で辞めてからこの会も自然消滅した。この研究会の会員には労働調査の専門家がたいへん多かった。戦後の社研の労働調査の中心を担ってきた高梨さん、氏原先生はよく病気されていたので実際はあまり労働調査はやっておられなかつたようですが、あと小池和男さん、それから藤田若雄さん、山本潔さん。この5人が労働調査のプロでしたね。戸塚さんはほとんど調査はやっていない。わたくしを育ててくれたのは、これらの労働調査の専門家たち、とくに氏原先生と小池和男さんです。

だから労働調査で育ってきていたものですから、この労働運動研究者集団の議論には全然ついていけなかったのです。労働者の階級意識とか階級的労働運動といった言葉がフワフワ飛び交っていて、何か浮世離れた遠い話を聞いているようでした。あんまりつまらないので途中でやめてしまった。少し変な集団だったなというのが僕の印象です（笑）。

**川上** 私は常に変なことをやっているわけです（笑）。

**萩原** アメリカでもニューヨークへ行くと、労働運動支援グループというのがたくさん集まっていて、年中過激な議論をやっているんです。あいうものはあまり読まないほうがいいですよ（笑）。戸塚さんはそういうセクトのパンフばかりを紹介しているのです。左翼崩れのインテリ、ドロップアウトしたインテリ連中が書いたものです。

それよりも自動車労組UAWがやっている職場の苦情処理活動や、ローカルの委員長の苦労話をしっかり調査して日本に紹介しなければだめです

よ。戸塚さんの仕事はほとんどナンセンスですね（笑）。

**粕谷** それで田中機械の調査をやるということだったけれど、私はアメリカ（UCバークレー校）へ留学したので参加できなかった。帰ってきてしばらくしたら、80年代の初めから中ぐらいにかけてですが、ちょうどその見直しの雰囲気が出てきた。杉浦さんと、それから田中学さんもいたか、ここで何とかしないともうだめだろう。何か新しい方向や何かを打ち出せないかと研究会をやるかと言っていたのだけれども、それは進まなかったんです。

進まないうちに、私はいろいろ迷って、彷徨して、結局、あの集団の合宿にこういうのはどうだというのを出したのが『社会観の選択』の一部なんです。

#### 階級的労働運動論から新しい社会運動論、そして社会的経済としての協同組合論へ

**萩原** ただ、最後になって、ようやく粕谷さんはいいところに来たなというのが僕の印象です。大内さんが平和経済計画会議で、『国民の経済白書』の編集委員長みたいなことをやっていたのです。粕谷さんは大内門下ですから、経済白書の執筆などで大内さんの助手のようなことをやられていた。生協や労金の調査、そういう仕事をやらされていた。最初はたぶん、粕谷さんは嫌々やっていたのでしょうか（笑）。

**粕谷** 嫌々じゃなかったよ（笑）。助手の仕事ではなく、研究会に誘われた。その際、いろいろ調査をしたけれども。

**萩原** 嫌々やりながら、だんだんはまっていったのではないですか。それで生活クラブと接点ができてきて、ここでようやく粕谷さんは、足が地について、夢想ではなく人間の生きている姿をリアルに観察しながら考えることができる、本物の社会学者になったのではないのでしょうか（笑）。

**川上** 最後の大事なところは彼の大著、書いた本が成果になるわけだけれども、それは私が中心になってやっている研究会の土曜会での粕谷、

柏井両氏の出会いから始まっているんです。大内先生の会から始まったわけではありません。土曜会に柏井さんが参加して、柏井さんは経歴から言ったら左翼の運動をずっとやってきたわけだけれども、実に地に足がついているというのか、そういう人で、その彼の経験の蓄積と柔軟な理論化なしには、おそらく今日の粕谷は存在しなかったであろうというぐらいの出会いだったのではないかと思います。

**萩原** 土曜研究会で顔見知りになったのはいつごろですか。

**川上** 『社会観の選択』の刊行が87年、その後、割にすぐですね。

**柏井** そのころですね。僕が83年に上京しましたから、ちょっと前後していますね。

同じ1940年の生まれなので、その意味では同世代なのですが、粕谷さんの経歴を見ると、やはり焼け跡世代のことや疎開、極貧であったというのは全く共通体験で、1940年という、皇紀2600年と言われた日本植民地支配の一番の頂点のような年に生まれています。私はその天皇誕生日の晩に生まれたので、裕仁からとって宏之という名前で、しかも私は朝鮮で生まれていますので、森崎和江ではないけれども、植民地2世という負い目があった。そういういわばアジアに広がって展開されている粕谷さんの議論の、この間の一連の展開を見ている、そういう意味では日本の帝国主義的膨張みたいなものがどこか世代体験の中にあるのかなと思っているんです。

その意味で農業問題に周辺からというお話でしたが、僕も労働運動を見ながら、実は未組織労働者のサークルをつくって、圧倒的に多い未組織労働者と中小企業労働者の連携のようなものを考えるサークル運動みたいなことをずっとやっていた。全共闘やら新左翼とはずいぶん距離が違うところにいながらやってきて、『社会タイムス』の編集をやっていた。

それからちょうどお会いするころからだと思いますが、福岡の奥田八二先生が関係のある社会問題研究所に頼まれて、佐伯造船の取材に行ったルポを書いたのを粕谷さんは読んでおられた。それで「えーっ？」という感

じで、出会った直後ですね。

**粕谷** いろいろ話を聞いたり、資料をもらったりした。

**粕井** その意味で周辺から、逆に言うと労働者階級の戦闘性も見えるけれども、戦闘性が公務員労働者を含めて、非常に限定されているところもあるので、そのへんがどのように連関を持って主体を形成するのかとずっと思っていた場所にいたんです。ですから、事前に送っていただいたレジュメなどを見ながら、周辺から階級形成を考えたいけれども、階級形成だけではなかなか難しく、もっと大きな地域基盤などを考えなければいけないということがあった。

それで僕は大学を出た後、レーニンの中でも「協同組合について」という新ネップ政策をとって以降が、社会主義建設の上では重要な論文だと考えていたんです。『国家と革命』など、右を切り捨てたときのレーニン主義よりも、社会主義を担うためには遅れた人々をどのように引き上げて、文化水準を上げて社会主義の担い手をつくるか。そう考えたときに協同組合しかないということで、脳溢血の中で「協同組合について」をプラウダの元旦号に1923年にしゃべるといふ、あの論文が大事だと思った。資本主義を倒した後に社会主義はどうするんだと思ったときに、協同組合的な手法しかないかなと思って、コープこうべに入ったんです。

しかし、コープこうべで挫折して、労働組合をつくった。それで代わって、今度は東京に来て生活クラブというものに出会って、タイプの違う協同組合に触れた。ちょうどそのときに粕谷さんに出会う格好になった。規模、スケールメリットで押していく協同組合もあるけれども、基本的に資本主義の中にながら、もう一つのalternativeな価値を持って、どのように地域日常生活をつくりかえていくのかという手法が生活クラブの中にあった。そして、そこのなかでは自主運営、自主管理という手法で組合員が考えろというかたちで、いろいろ地域づくりをやってきたのに出会って、それで土曜会のテーマの中でも、そういう意味では協同組合側からの発表をさせてもらった。

それから、非正規雇用や中小企業の運動は、ユニオンの運動をされている側からの高井さんなどの発言があって、この土曜会は、先生たちの非常に大きなスケールの話を書くと同時に、土曜会自身が大きな主体、大文字のSUBJECT論から小文字のsubject論へ転換するということだった。粕谷さんの、ポストモダンのニヒリズムではなくて、もう一度、生活世界に戻して、デフォルメされすぎた剰余価値論だけでは現代の主体形成は難しい。だからもっとさまざまな違ったところでの主体形成のネットワークが必要なのではないかという提起。そういうところに出くわしたもので、それ以降、ずっと長いお付き合いをさせてもらっています。

出会って3年ぐらいたって、僕自身が生活協同組合研究、『Q』の編集を一任されて、この1号なんですけど、実は9から始まって1に来ているという逆戻りの番号なんです。その編集で川上さんや粕谷さんと相談して、レイドロー報告からちょうど10年、レイドローの書いた、21世紀、『西暦2000年の協同組合』まで後10年ある中で、どういう21世紀に向けての絵を描くかということで、労働論、生活論、地域論を軸とした編集をしました。

お話にあった田中機械、私は大阪にいましたから、全金、田中機械ともずいぶんずっとお付き合いもあったので、そういう実践と現場の人たちと研究者の連携みたいなものを書いていただく機会を得たんです。

それで出会って、その意味で先ほどの平和経済に書かれているような事柄で、協同組合や共済とも深い粕谷さんということで、だんだん協同組合の中のいろいろなところに来ていただいた。そして2001年、9.11の2週間後にモンドラゴンとフランスの労働者生産協同組合と、イタリアの社会協同組合を見て回る旅に、粕谷さんをお誘いする格好になって、それを契機に次は社会的経済のモンブラン会議があるということで、ぜひ行ってほしいという電話をかけました。

「いや、それは日程も詰まっていて、絶対だめだ」というけれども、「研究者が来いというので、しかるべき研究者に行ってもらわないといけない」ということで。

粕谷 半ば強引に（笑）、清水の舞台から落とされてしまった。

粕井 私の隣にいた職員から「大学の先生にあんな言い方をしているんですか」と怒られましたが（笑）、無理をお願いして、それでモンドラゴンに行っていました。

萩原 粕井さんの活動の場は生協ですか。

粕井 生活クラブ生協です。私はたまたま市民セクター政策機構の、最終的には理事長になりましたが、そこにいたので、『社会運動』を出していました。

粕谷 生活クラブのシンクタンクですよ。

#### 一応の到達点：増補改定版『社会的企業が拓く市民的公共性の新次元』

粕井 そういうことで粕谷さん、川上さんとこの間ずっとお付き合いさせてもらってきて、特に今回の増補版の一連の図と合わせて、特にラディカル・デモクラシーについて関連させている図表が39ページにあります。小さい図ですが、ここで民主主義を巡って相争う諸潮流、諸思想ということで、ラディカル・デモクラシーでもいくつかのタイプを分けています。

単にリベラル・デモクラシーだけではない新しいかたちと価値観を持って、そのすきまに主体として登場してくる新しい運動のスタイル、それから全共闘の最終の局面ではありますが、見方を変えて自己否定して行って、新しい時代に合った価値をもう一度生み出していく。そういうかたちみたいなものが、システムと主体との間に運動の形態としては、ラディカル・デモクラシーという交差をはさみながら、いろいろできることがあるのではないかということについては、たいへん共鳴しました。

この論点自身も、川上さんの先ほどのカタストロフィー論ではありませんが、大きな危機との間でこんな悠長な運動は生きられるのかという議論がありまして（笑）、それを基にこの増補版の個々の図表が書き換えられているんです。その意味では僕としては非常に面白いと思っているのですが、



なかなかそのところはまだ広い共感を得るところには行っていないので、これからの社会的課題かと思っている付き合いをさせてもらっています。

**粕谷** 書き方がとっつきにくいというか、福留さんは何回読んでも理解できないという（笑）。だから、普通の人というか、協同組合の人や、あるいは労働組合でもいいけれども、その人たちが読んでいて、一番初めにガツンとハーバーマスが出てきたり、多文化市民的公共性などが出てきたじろいでしまうのかも知れません。



柏井宏之氏

**萩原** そのとおりですよ。この本は一生懸命書いた本だけれども、ものすごく出来が悪い本だと思う。

**粕谷** そうだと思う。改めて自分で読んで、わからなくなっちゃう（笑）。

**川上** 読者のことを全然考えていないんだね（笑）。

**萩原** 読者に対するサービス精神がまったくない本ですね。

**川上** それを、書くたびにこっちは苦言を呈しているのだけれども、彼の頭の構造がそうになっている。いくら苦言を呈してもだめなんだ（笑）。

**粕谷** こういう場で砕いていただければ、もう少し砕けるのかなという気がするのだけれども、文章に書こうとすると、どうも初めに構えてしまっただけね。

**福留** 勉強しすぎだという気が僕はしますね。ハーバーマスを粕谷さんに解説してもらったりはだいぶわかるのですが、その後の人たち、大きくは同調しながら小さい点でハーバーマスを批判した人たちの話が出てきますよね。そのあたりになるともう追いついて行けない。

**萩原** ハーバーマスを取り上げる必要はなかったのではないのでしょうか（笑）。ハーバーマス社会学は、やっぱりドイツに特殊な社会学なのではないかと思います。第三帝国（ナチズム）を熱狂的につくってしまったのは、ほかならぬドイツ国民でしょう。ドイツが再びああいうことにならないようにと思って、ハーバーマスは社会理論を組み立てていった。ハーバーマスの理論は、ドイツ国民にナチズムに対する免疫を植えつける目的でつくられた理論なのではないですか。

ハーバーマス理論は、粕谷さんのアソシエーション理論とはあまり関係がないのではないですか（笑）。

**粕谷** いや、アソシエーション、市民的公共性の再建という点で、共通性があります。たとえば福祉国家の揺らぎというのがあるでしょう？ ハーバーマスがごく初期に書いた『公共性の構造転換』、あれは結局、福祉国家の行き詰まりをハーバーマスなりに出したんですよね。どうやって再び構造転換して福祉国家にアソシエーションの息を吹き込むか。そうすると、こういうふうにしてでなければね、と論ずる。

**萩原** 現代のオランダとかスウェーデンを、全体主義国家だと思っている人がけっこう多いのですよ。福祉国家は、国民の生活のすべてをガッチリとコントロールしてしまいます。男女間のセックスまでコントロールしてしまいかねない。これは恐ろしいことじゃないですか。ハイエクの『隷従への道』やオーエルの『1984年』が強調していたように、社会民主主義が生んだ福祉国家なるものは、ナチズム以上に恐ろしい全体主義国家なのではないでしょうか。

ナチズムの場合、ドイツの失地回復というか、ナショナリズムが原動力になっていた。しかし現代の福祉国家は、ナショナリズムではなく社会保障の充実を掲げて国民を統治しようとしているので、国民の支持を得やすい。しかし福祉国家は、本質的に全体主義国家である。このままいくと、ヨーロッパ全部が全体主義国家になっていくのではないかと、民主主義の仮面をかぶった全体主義国家になっていくのではないですか。

粕谷 それは言い過ぎ（笑）。

萩原 ハーバーマスは明らかにそういう危機意識を持っていますよ。だから、ハーバーマスの関心は、政治体制の問題、国家体制の問題に収斂する。

粕谷さんは、既成左翼のように「何でも反対」の抵抗主義から離れ、alternativeを提起していこうとしている。今までの反体制運動とは違った運動を、起こしていかなければいけないのではないかという。僕は、粕井さんの意見にはすごく共鳴できます。粕谷さんもようやくその点を理解できるようになった。ああ、ここまで粕谷さんは大きく前進したのだと思う（笑）。

川上 やっとまともになってきた（笑）。

萩原 まともになった。その前はややルーピー（狂的）というか、インテリっぽすぎて、哲学の本を読みすぎた人みたいな感じだった。

粕井 だから、いつも粕谷さんがやっているのはこういう格好ですね。図表をいっぱい論文に入れて、その図表に沿ってしゃべっていただくと非常に具体的でわかりやすい。こういう格好になって、社会的経済というのを逆にいえば一番啓蒙的にしゃべっていただけなのは、粕谷さんではないかと思って。

### これから地域に根ざした社会的企業をつくっていきたい

萩原 粕谷さん、もう少し具体的に聞きます。労働組合や左翼政党とは少し離れたところで活動している生協とか、あるいは日本では労働者の生産協同組合は非常に少ないけれども生産協同組合、大きいところでは農協や漁協に興味を抱いたことがありますか。

大内ゼミで農業経済学を勉強したのですから、農協のことは興味もっていたにちがいないと思っていました。ところが、あにはからんや農協にはほとんど興味がなかったという。それで少しショックを受けました。

私の母方の実家は、農協の元祖である産業組合をつくった岡田家なので

す。第1回衆議院選挙に静岡県掛川から立候補して当選し、平田東助や若き柳田国男らとともに、産業組合法を制定し、掛川に農業信用組合をつくった。岡田良一郎といって、二宮尊徳の弟子の一人です。ですから二宮尊徳の事業を引き継いで、農村コミュニティの再建運動に生涯をささげた。掛川で設立された報徳会の運動がそれです。

一方で、生産者の組織としての産業組合をつくり、自作農中心主義で篤農家の養成に力を入れ、他方で信用組合を通じて農村共同体を再建しようとした。農業金融が中心ですが、信用組合のアイデアも二宮尊徳に由来するのです。

粕谷さんは、せっかくalternativeをだしていくという建設的な思想に近づいていきながら、日本の農村や報徳運動などには関心をもたないのですから、思想に具体性がないですよ。

**粕谷** たしかに、もっといろいろ論じなければならない。そう努力しましょう。しかし、ちょっといいわけ。

農協は、かつては食糧管理制度の下で、ほとんど国家行政機関の下請機関、例えば、金融も政策金融を流すパイプで、農家からの預金は農外に流してしまう俗にいう「すれ違い金融」、購買や販売は巨大商社みたいで、興味がわかなかった。

しかし、最近では、食料、農業、農村の再生の視点からわがゼミの二大フィールドワークの一つで、農協組織をどう改革するかも大きなテーマの一つとなっている。集落営農、農協改革は増補・改訂版の目玉の一つです。

フィールドワーク先の二大領域の二つ目は、身体、精神、知的、発達障がいなどさまざまなタイプの障がい者、シングル・マザーや長期失業者、ホームレス、外国人労働者、さらにアルコールやドラッグ中毒者、刑務所から出てもまたすぐ戻ってしまうような犯罪常習者などさまざまに社会的排除を受けている人たちをさまざまな形でケアしつつ、必要な再訓練を施して、再び社会や労働市場に再参入させたり、自分たちで雇用を創出したりする社会的経済の領域です。

ゼミのフィールドワーク先の二大領域ともそのほとんどは柏井さんの案内によるもので、関西、東京、千葉、山形、さらに韓国にまで亘る。

また、とくに親しくしてもらっている組織に、自分たちで出資、経営し、働くワーカーズ・コレクティブがあり、いろいろな領域のワーカーズ・コレクティブをゼミ生と共に見てきた。

さらに、とくに、いま現在、柏井さんたちが進めている、今紹介したような社会的排除者を社会、労働市場に再包摂する「社会的企業」を促進するための「社会的事業所法」制定運動については、その苦勞も含めて、現在進行形で案内してもらっている。

社会的排除を受ける人々はもちろん、再包摂する運動も結構それぞれ縦割りで孤立している。それらを横にどう連帯させ、社会的企業セクターが連帯した力で立法や行政にどう働きかけて、社会的企業セクターを促進していくか、そのフロンティアをつくる過程へ案内してもらっている。

とくに注目するのは、いま、アジアではじめて「社会的企業育成法」をつくって日本に先行している韓国と日韓（やがて日韓中）社会的企業フォーラムを企画して、このような社会的企業の国際的連帯をつくり、韓国が前進していることを日本が学び、逆に、日本が意味あることをやっている部分を韓国が学ぶという学び合いの連帯をつくり始めたことです。韓国の社会的企業育成法の再包摂対象はワーキング・プアも入る広い規定の脆弱階層と呼ぶものですね。

**柏井** 脆弱階層。世代、ジェンダーごとに平均収入の60%以下をさします。

**萩原** 今の話は面白いですね。韓国の将来には非常に展望があるのは、キリスト教徒が多く、教会が活発だからです。

**粕谷** それぞれの地域にはそれぞれの文化、だから、多文化。しかし、共通して連帯できる。

**萩原** 要するに何教であれ地域にたくさんチャーチができればいいのです。日本には残念なことにチャーチが少ない。

粕谷 それに代わるものをつくる。

萩原 町ごとにいっぱいチャーチがあってほしいですね。

粕谷 それに代わる鎮守の森があったり。

萩原 日本でそういう運動をやってきたのは救世軍ですよ。浅草の山谷や吉原で、しつこく売春婦の問題に取り組んできたのは救世軍です。この運動は、ついに売春禁止法にまで持って行ってしまった。だから、地域で、しかも排除された社会的な弱い人たちをどうやってネットワークの中に入れて、人間として生きていけるような状況をつくっていくかというのは、最後の最も難しい問題ですね。

キリスト教の国々では教会が伝統的に、特にカトリックは教区単位で、救済事業をやっている。今でもそうですが、教区単位で教会がやっていたことを国がやるようになっていったのがヨーロッパの社会政策の歴史です。

日本にはそういう教会に当たるものが、残念だけれども、江戸時代にお寺が墮落して葬儀屋になってしまったため、地域の救済機関としてのお寺という機能を失ってしまった。神社も同じです。

粕谷 そこで絶望してニヒルになるのが馬場理論なのだけれども(笑)、もう一つの選択は教会、宗教ですよ。神ですよ。神の国をつくろうといろいろあるわけです。つまり、絶望するか、神をそこへもってくるか。これらがまた両極端なのです。

我々がやろうとしていることは、人間が、普通の人がある間で何かできないかというのが、社会運動、社会的経済なのです。そして、それを政策的に強くするためにマクロ体制と連携させる。それが連帯経済です。社会的・連帯経済。増補論文ではそこに力点を置いた。

それから、日本だけではなくて、世界的に文化や伝統、産業も違うし、人も違うのだから、それなりのしかたがあるだろう。要するにキリスト教会だけではない。何かそれに代わるものがあるだろう。あるいはなければ、それをつくり出す種のようなものがその地域地域にある。それが多文化な

のです。それが前のよりも進めた点で増補・改訂版にした二つ目の力点です。

**福留** 位置づけはわかります。

**萩原** 江戸時代は、村の社会福祉を担っていたのはお寺や神社ではなく名主さんです。村方三役です。らい病の歴史を調べてみるとわかります。らい病（レプラ）患者は放置されていたわけですが、しかし、らい病の人をちゃんと保護するということが村の課題だったのです。名主がやっていたのです。ちゃんと食べ物を与える。それから水浴びをさせるとか、寝る場所も提供した。皆、近づきたくなかったから名主がやるしかなかったのです。江戸時代の農村共同体は、高度な福祉社会でもあったのです。

今は、教会もないし、お寺も機能を果たしていない。無縁社会が広がってしまった。

**粕井** それを粕谷さんの言葉で言えば、あいだパラダイムというかたちになっていて、信じる者もいれば信じない者もいるわけですから、その意味でいうと結局、普通の人間の間を超えたつながりとそのネットワークをつくって、それが一つのアソシエーションを形成すれば、それがまたネットワークして、その中間支援組織、コンソーシアムを生み出していく。そういうかたちで、現代の教会に代わる、いわば人間の相互扶助的連帯が、逆にいえば市場経済をむしろ普通の経済の中に埋め戻して、人間の日常的目線でいわば支え合う、ケアも含めた、そういう視点が普通にある社会のようなものにつながる。そういう意味では、宗教に代わるものを、コンソーシアムというか、中間支援組織をたくさんつくっていく以外になかなかないのではないかと思っています。

**萩原** スペイン、イタリア、フランスは、カトリックの強かった国で、カトリックの社会事業はそうとうなものでしたから、カトリックに対抗しようとする左翼は、協同組合を重視せざるをえない。カトリック教会がやってきたことを、宗教抜きで模倣して、擬似共同体をつくろうというわけです。

**粕谷** 我々のもだいたいそれに近い。柏井さんに誘っていただいた「協同組合の旅」で、そこらを廻って見てきました。

**萩原** カトリック教会の長い歴史があったところでやるわけだから、ごく自然ですよ。モデルがあるのだから。教会のような組織を別につくればよいということですから。

日本の場合、江戸時代の福祉社会や共同体が解体した後に、alternativeを自治体と国がやるというようになっていった。国ではやっぱり限界がありますね。

**柏井** 限界はありますが、今、韓国も日本も逆に政権交代が起こって、実は韓国にないものが日本にあって、日本にないものが韓国ですでに先取りされている。ここ20年ほどの韓国の民主主義下の民主主義みたいなかたちちがずっと進みましたから、そのかたちで相互に示唆になって、ヒントになるというのは結構あるんです。

それ自身がまた主体を培養していく。それぞれを激励していく要素になると思うので、そういう意味ではアジア的な市民社会というか、アジア的なネットワークの形成ができる。

**萩原** 韓国の活動家、社会事業に熱心な人たちはクリスチャンですか。それともキム・ジハのような。

**柏井** 両方含んでいます。キム・ジハのほうも含んでいます。

**萩原** 東学党の伝統が残っているようですね。

**柏井** はい。今やっている人たちは、そこにクリスチャンもいれば左翼もいる。

**萩原** 日本にもだんだん無縁社会が広まってきた。150歳の人はまだ生きていることになっているとか（笑）。すごくおっかない、ひどい話ですよ。死者になると、係累があった人でも死体のまま放置されてしまう。最悪の場合、年金だけ横取りされているとか。ここまでひどくなってしまうのかなと思うと愕然とします。江戸時代には、こんなことは絶対あり得ないですよ。長屋で隣のやつが死んだら、すぐに近所の人たちが葬式を



だしますよね。

粕谷 江戸時代は、しかし、そんな良いこと尽くめではない。一揆や直訴、うちこわしなどがあり、『自然真営道』を著したラディカルな革命思想家安藤昌益もいたからね。

萩原 日本社会全体がものすごく反省期に入っていると思うのです。こんなふうになってしまっているのかなという。そうすると進化論ではないけれども、alternativeがあちこちでぼこぼこ出てくるのです。

粕谷 出てくるのを期待する。ここは楽観的に。

粕井 たくさん出ています（笑）。

粕谷 それをもっと助長して、積極的に働きかけようというのが粕井さんですよ。

萩原 そこは全く同じ意見ですね。それで社会は進化していくんですよ。

粕谷 最後に一致した（笑）。放置しないで働きかける。

萩原 人間社会が危機に陥ると、必ずalternative movementが起こってくるのです。

粕谷 自然に起こるといって、そこがやっぱり、ちょっと違う。

萩原 自然に起こってくるんです。こうやってちゃんと粕井さんの生協運動が出てきたのです。

### 社会的経済は自然発生的に生まれてくるのか

粕谷 粕井さんも自然に出てきたと思いますか（笑）。

萩原 そうです。生活クラブの運動も、社会の進化過程で生まれてきた自然な現象なのです。

粕井 それは土曜会で川上さんを含めて、党派や前衛というものに期待したところから、一番早く小さい主体に着目しています。

萩原 まさかレーニズムや前衛論をいまだに信じているわけではないでしょうね。

柏井 自主管理以降、その意味では徹底してノーです（笑）。

粕谷 そこは全く転換している。

萩原 大衆の自然発生性に拝跪するのが良策なのです。前衛の目的意識性を重視したレーニンを信じてはなりませんよ。レーニン前衛党論は、あれは独裁国家を肯定するもっとも醜悪な理論なのです。

粕谷 だから、目的意識で上からエリートがこういうふうにするというのではなくて、一般の下々、普通の人々が目的意識を持って動きだすと、だいぶ違ってくるのではないか。

萩原 放っておいてもそうなりますよ。インテリが何も言わなくても、自然にそうなるのです。

粕谷 そうしたら、何も研究者とか要らないじゃない。あるいは政策提言者は要らないじゃない。たしかに、それらはいらないかもしれない。しかし、さっき柏井さんの言った中間支援組織、たとえば、協同組合をつくり、それらのネットワークをつくってその動きを促進しようとするイニシャティブもいらないのか。

萩原 イギリス労働組合運動の誕生から発展の時期に、誰かインテリが組合を指導していたわけではないのです。まさに自然発生的に、職人さんたちが生活防衛のために居酒屋（パブ）に集まって、酒を飲みながらつくったのが労働組合（トレード・クラブ）なのです。それがあれだけの巨大な労働組合運動に発展していったのです。放っておいていいのです。むしろインテリは余計なくちばしをいれないほうがいい。

粕谷 そうしたら、研究者も、柏井さんような有能なコーディネータも何もいらぬ、あるいは政策提言者は要らないじゃない。

萩原 ただ、つくる人たちは必要ですよ。協同組合をつくったりする人です。

粕谷 それが大事な点です。つくる人はどうやって出てくる？

萩原 だから、自然に出てきますよ（笑）。世の中にニーズがないところで革命を起こそうといっても不可能でしょう？

粕谷 いや、革命なんて起こそうと思っていない。

萩原 革命も自然に起こりますよ。レーニンが言うようにインテリが指導しなくても、働く人たちは生きていけなくなったら立ち上がりますよ、必ず。

粕谷 インテリが指導するような革命ではだめだ。それが歴史の反省。

萩原 社会運動には、外部から潜入してくる指導者なんか要らないのです。よそものの指導者はお断りです。インテリの設計主義だけは困る。粕谷さんの間違っているところは、社会を設計図でつくっていかうとする設計主義にあると思います。

粕谷 「大きな主体」、事実上は「エリートの主体」は駄目だ。大内さんではないけれども、ミツバチと人間の違い。

人間は、エリートだけでなく、誰でも、そうしようと意思をもって行動する。だから運動が起こる。社会運動とは、最初生まれた小さな芽を育て、拡げて社会改革に結び付けていくことですね。「小さい主体」にしろ、主体の問題が重要だと思う。

「エリート」が外から指導する「大きな主体」は駄目だから、すべて自然に委ねる。そうすれば、必ず危機は自然に克服される、というのは、一方の極から他方の極への短絡です。庶民、大衆だって主体性を持ち、他者に働きかけ、連帯をつくり、未来を設計し得る主体的在りようも可能です。「小さな主体」たちの連携、ネットワークによる、例え部分的な改革であっても、普通の人々による主体的社会変革というのが、両極端の「あいだ」にあり得るでしょう。そのような幅があり、その幅のなかにそれに連帯しつつ、独自の役割を担うコーディネイター、中間支援組織、そしてあくまでも脇役ですが、研究者や政策提案者がいれば、場合によっては運動—改革は促進されるでしょう。

しかも、重要な点は、これらの社会運動はいつでも成功するとは限らない。現在の危機の克服に人間が失敗する蓋然性も大きいと思う。そうだからこそ、草の根の、普通の人々・「小さな主体」たちの、より広い、大きな

連帯、そして国家や市場システムへの働きかけが重要になっていると思う。何もしないでよいとはならない。もし、それが成功して21世紀以降の人類史が持続すれば、遠くから傍観している人から見れば、人類史は、自然と進化を遂げ、21世紀以降も続いていくように見えるかもしれない。しかし、そのプロセスは、ブラック・ボックス。われわれは、そのブラック・ボックスの中に入り込み、失敗するかもしれないこのプロセスの成功のため、草の根の「小さな主体」たちの潜在能力増進に加わって行こうというのです。われわれは天国と地獄のあいだに宙吊りになっているのです。

人類史に期待をかけるという点で、「人間を信じる」という萩原さんに近いところにいると思うけれど、だいぶ違うかもしれない。逆に、だいぶ違うようでも、さっき、ついに一致したと言ったように、非常に近いところにいるかもしれない。

**福留** 一つだけ付け加えます。大内先生が去年、『日本経済論』の下巻を出されたのです。そこに粕谷さんの影響が認められます。「中小零細企業の構造」というのが第2章第4節にあります。従来の大企業と中小企業といった区分と別にNPO組織がとりあげられています。そのなかでこの本、『社会的企業が拓く市民的公共性の新次元』への言及があります。

面白いのですが、注記に引用された書物は2006年の初版なのです。ところが、非営利組織の雇用労働者がどのくらい増えたかというのを図示してあるからそれをご覧なさいということで、指示されたのは86ページです。この図は初版では18ページにありまして、86ページにあるのは増補版です。増補版が出たのは奥付によると2009年5月1日。

ただし、実際に粕谷さんから頂いたのは4月中でした。大内先生は4月18日逝去されましたので、増補版を御覧になれた可能性はかなり低い。だから実際に増補版でページを指示したのは校閲者としてまとめた柴垣和夫さんだと思います。粕谷さんは大内先生にその部分は影響を与えて、大内先生が取り上げて、最終的な仕上げは柴垣さんがした。そういう構造です。

**萩原** やっぱり大内さんは偉いですね。最後に協同組合の意味に気づいた。大内経済学の一番いけなかったところは、日本農業論で農協がほとんど出てこない点です。農協抜き農業経済論ですからね。

**福留** 大内先生の『農業問題』とか『日本農業論』では「商人資本と農業協同組合」というのが必ず一項目入っています。お弟子さんでもたとえば佐伯尚美さんとか、鈴木博さんとか、ずいぶん農協論をやっていますよ。

**粕谷** 福留さんに送って頂いた『進歩と改革』誌2010年6月号で、『日本経済論』の下巻を福留さんが紹介しているのです。紹介されている部分は、内容的には社会的経済論ですよ。

大内さんが88歳の米寿のお祝いのおときに、大内さんから土産の本をもらったんです。それがこういう本です、『協同組合社会主義論 大内力語録』。これは大内さんが講演やシンポジウムなどで発言したもの、あるいは雑誌に書いたものを編集したものです。

この本の編者、武市蕭という人が端書か何かで、かつて大内さんは自主管理を論じているときには、社会体制としては、資本主義と社会主義だけしかないといっていた。その間の第3の道なんてないと。

**福留** 「第3の道を求めるのは空疎である」という言葉を武市さんは紹介していますね。

**粕谷** ところが、実際はどうかはわからないけれども、この本でだんだん大内さんが本格的に協同組合社会主義論を論じて、協同労働とか、laborではなくてworkとか、人間関係資源みたいなものを重要視するようになってくる。それがいつかというのをずっとフォローしてみて、1992年に体系化したという。だから、大内さんは晩年になって、今までの考えを変えてきたという。

だから、大内さんがだんだん変わってくる時に僕は内内さんと平和経済などで、仕事をさせてもらったという縁があったんですね。

これは協同組合社会主義のことだけれども、福留さんが電話をかけてき

て、『農業の基本的価値』という本を大内さんは出している。ここには武市さんが証拠を挙げて、このへんから変わったと言っているけれども、ちょうど同じころ、むしろ、農業ではもっと前に変わってきたのだというのを彼から聞いたんです。

**萩原** 粕谷さん、最後に質問したいのです。大内先生のことはともかくとして、僕は最近、中小企業基本法の規定でいくと、常時使用している従業員の数が20人以下の小企業が生産協同組合に近いかなと思っているのです。町工場を経営している社長のなかには、社長と呼ばずに代表といえという社長も多い。経理はガラス張りで、超過利潤は賃金として分配してしまう。賃金と利潤とが分離していない。それから仕事は流れ作業ではないですから、皆自立して仕事をやっているのです。

だから、僕はそこに生産協同組合の萌芽のようなものがあるのではないかと思っているのです。中小企業の中のほうにはあまり興味がないのですが、小のところがおもしろい。調べてみると、そこにはすばらしい世界がある。

**粕谷** そうですね。近いとか、萌芽というのはあるでしょう。それは素晴らしい。しかし、残念ながら、それがまた一色に塗れないというところがある。そういうのを探せば出てくると思う。それだから20人以下のものは皆そうだとはいえない。

**萩原** どう思いますかその点を。日本の製造業の20人以下の町工場といわれているところは生産協同組合に近いのではないか。労使関係はないのです。創業者はいるけれども、事実上、全員がフェローというかアソシエイトのようになってしまうんです。

**粕谷** しかし、ちゃんと法形態で、生産協同組合と規定し、もう少しちゃんと運動的、法的に下支えしないと、育て、広げられないのではないか。いいとこ取りをすれば萩原さんのいうようにも言えるのもあるだろうけれど、多くは、労働者に悪いとこのしわ寄せをしているのではないだろうか。ワーカーズ・コレクティブや「共同労働の協同組合」の法制化でも、

そういう点が問題になっている。なかなか難しいね。

**萩原** 中小企業論の専門家にむかってたいへん失礼なことをいいますが、中小企業をちゃんとお調べになっていますか。大田区にはそういうタイプの小企業がいっぱいありますよ。4000社ぐらいありますかね。

**粕谷** やっていないけれども（笑）、なかにはあると思うけれども、全部ではないと思う。

**福留** それは面白い問題だと思います。フランスなんかはどうなっているのかなと思うんです。というのは、第1 インターナショナルのなかで、マルクスがフランスのプルードン主義者たちと対立しますよね。プルードンではないか。

**萩原** むしろフーリエじゃないですか、協同組合主義の源流は。サンシモンの社会主義はどちらかというと大企業を国有化するというようなイメージなのですが、フーリエやプルードンは小生産者重視ですね。強引に言えば、協同組合社会主義に近い。

**福留** 小生産者重視派と賃銀労働者重視派との対立があったのじゃないかなという感じがしますね。

**川上** それは共産党宣言そのものが、非常に印象的に対立を語っている文章ではないでしょうか。

**萩原** マルクスは、フランス社会主義から相当密輸入している。あのアソシエーション論もあきらかにそうだ。

**川上** いや、共産党宣言はフランス社会主義からきているけれども、フランス社会主義、実際にあるフランスの労働運動の評価は非常に低いんです。だから、実際に持っていた有用性をマルクスは理解していない。

サンシモン、フーリエの後に出てくるもう少し実践的な連中がフランスにいたわけだけでも、それに対する評価が低いですよ。

**福留** 彼らのほうが多数派になるとき、マルクスは第1 インターナショナルを移しますものね、アメリカに。負けそうになって。

だから、それは萩原さんが言うようなそういう存在と、粕谷さんが学ん



萩原進氏

できた経済学の違いでしょうね。

**萩原** 粕谷さんはせっかくいい方向に転換しながら、しかし、まだ足が地についていない感じがします。まだ空中を浮遊している(笑)。粕谷さんの地元は、大田区ですかね。

**川上** 君が連れていけばいいんだ(笑)。

**萩原** もう少し町工場のおっさんたちや労働者と付き合ったらいいと思うのです。

### 退職後の生活プラン

**福留** 今後どうするのかということを知りたい。最後ですから(笑)。

**川上** もうだいたい出てしまったのではないかな。だから、萩原君が粕谷君を大田区の小工場へ連れていくと。

**粕谷** 前に誘われたことがあるんだけどね。

**萩原** 柏井さん、少しずれるかもしれませんが、僕は今非正規雇用、派遣はあまり興味がないのですが、アルバイトに興味をもって少し調べはじめています。非正規雇用が雇用の中で占める割合がものすごく大きくなってきてしまったので、これからいろいろと問題が起ってくる。放っておいてもいいのですが、何か深刻な問題が起ってくるかもしれないと予想して、企業も労働組合も悩んでいるんですね。

僕は今吉野家をはじめ、フードサービスのチェーンの労務管理に注目しています。吉野家は今、国内に1000店舗以上あるのですが、あれだけ大きいチェーンになってくると、各店舗は7、8人で経営していますが、店長



以外はほとんど全員アルバイトです。しかし、バイトをきちんと系統的に訓練して店長代理をやるようにして、それから店長に昇格させている。なりたい人は正社員にもなれるというシステムを確立しているんです。

これは不安定で流動的なアルバイト雇用を内部労働市場化させていく、たいへん面白いケースだと思って、今吉野家の調査をやろうとしているんです。

**粕 井** いわゆる名ばかり店長で責任者にして、長時間働かせて、あとはバイトだという形態については、結構ユニオンが出て、それから不払い労働についても結構取っているんじゃないですか。ずいぶんいくつか聞きますから。裁判もかなり出て。

**萩 原** 吉野家の賃金が高いのにはびっくりした。平均年収が900万円なんです。

**福 留** 店長クラスですか。

**萩 原** 正社員の平均賃金ですね。ということは、アルバイトもかなり高いですよ。

**粕 井** 高いのもあるし、安いのもあるんじゃないですか。

**萩 原** ただ、店長になるまで30項目の技能をマスターしなければならないのでたいへんです。そうすると最後に残るのはやっぱり不適應の問題ですね。近代社会の中で適應して生きていけない人たちというのが、最後に残ってしまいます。

**福 留** 最後に残るというのは、店長になり得る者としてですか。なれない者として？

**萩 原** 店長に行くまでに5段階あるのですが、1段階、2段階まで行くのが精一杯。1段階というのは接客だけです。2段階だと盛り付けが入る。盛り付けから次に煮込むとか仕入れとか経理とかになってくると、もうだめという人が出てきます。

だから、排除と言いますけれども、人口の何%かはそういう人たちがいつもあるわけです。そういう人たちを生活保護法でサポートするというの

は一つの方法です。公的扶助という解決策があるのです。しかし保護にたよるのではなく、なんとかして自立させ、少しでも所得を稼げるような状態にどうやって持っていくかというので、柏井さんたちの仕事にもものすごく興味を持っているんです。

人間社会は最後に、柏井さんたちがやっているalternativeの運動が、つまり町にチャーチが全国的にできてくれば、それで非正規雇用の問題は解決するのではじゃないですか。これだけ豊かな社会になったことだし(笑)。

**粕谷** 最後の一つ、たとえば白書もそうだけれども、日本の政府だからしょうがないけれども、日本の経済、日本の企業の視点からだけしか見ないんです。しかし、たとえばアジア全体の経済を見なければならぬのではないかと。また、個々の企業としては、日本国内で生産しようが、中国へ出て行こうが、企業が伸びればそれでよい。しかし、マクロ的には産業空洞化の懸念がある。新たな産業や雇用をどう創出するかという問題がある。

日本経済とアジア経済の全体が調和的に成長できるか、産業空洞化と新産業・雇用の創出のバランスがうまく取れるのか、じつは、きわめて難しくなっているのではないだろうか。

さらに、たとえば今、日本の企業が勝者になった場合には、逆に敗者として落ち込むところがある。あるいは落ち込む地域があるわけです。つまり、いまや、資本、技術の移動が国境や地域を越えて自由だから、比較優位産業で雇用が確保されるということなんてないわけです。絶対優位、あと、落ちるところ。移動の自由な国内経済と同じように、一極集中と他の地域の過疎化が起こる。このような世界的なグローバルな市場にはどういう対応するかという議論が、ほとんどないんです。

成長の限界という問題をおいても、中国なんてものすごくたいへんです。中国の東北部とかは、環境もだめだし、水もない。農業は多国籍企業的なものができて、農民はどんどん農業労働者になってしまうんです。その多国籍企業が、資源の取り合い、水の取り合いで、グローバルな争奪戦へ走

り始めている。日本経済から見ると、日本の多国籍商社などがそれらの争奪戦に加わって、日本へその成果を戻してきて、日本はサービス産業化していくというのが望ましいのか。

しかし、世界を見たら、これはまたたいへんな問題をつくりだしているのではないかという気がするんですね。まさに、グローバルな社会的経済のネットを強化することが切迫した課題になっている。東アジア共同体もそのような連帯を基礎にすることが必須だろうと思う。いま粕井さんが進めている日韓（さらに日韓中、そしてアジア規模でのそれを準備している）社会的企業の連帯づくりはそのはしりですね。

**萩原** そういうことで今日のところはこれで終わりにしたいと思うのですが（笑）。来年の3月に退職されて、毎日が日曜日という生活になるのですが、定年退職後はどんな生活を考えていますか。

**粕谷** よくは考えていないけれども、ちょっとこういうふうなのかなと思うのは、授業負担や教授会負担はもちろん、入試負担だとか、そういうものから解放されるでしょう？ そうすると、今までと急に変わったことはできないから、今までやり残して、定年退職の締め切りに間に合わなかったものがいくつかあるから、今までの継続のようなものが半分。

あと半分は自由になった時間を使って何か変わったこと、これをまだよく考えていない。それこそ定年退職の先輩である福留さんや川上さんに聞きたいのですが、何が一番生きがいがあるかなとか、これはよかったなというのを聞きたい。

一つは粕井さんが現役でどんどんやっているけれども、そこでいろいろ研究会があるわけです。今まで大学と重なって出られないことが多かったけれども、そこへ出て行って、いろいろ知見を広げたり、さらには、自分でも何かできればいいんですけれどもね。それで、粕井さんのお手伝い何か。それが半分。

そのほかは、何がいいのかな。書道だとか絵だとか、あるいは山歩きだとか、とにかくいろいろやりたいなと思うのだけれども、何がいいかな。

**萩原** 粕谷さんはUCB（パークレー）に留学されていましたから、アメリカの社会はご存じだと思いますが、教会の活動やコミュニティの活動が実に活発なのですよね。日本に教会がなかったというか、お寺が葬儀屋に墮落してしまったのは本当に返すがえすも残念ですね。

アメリカの人たちは皆、定年退職した後も教会でボランティア活動をするのを楽しみにしているのですよね。ところが日本ではどう過ごしていいか悩んだ末、ウォーキングかなんかに精を出す（笑）。粕谷さんは柏井さんのお手伝いをやるのでしょうか。

**福留** 私の希望としては、さっきも少し言いましたが、川上さんや馬場さんの世代と我々より少し下、法政でいうと河村哲さんがそうですが、あの世代はSGCIMEという集団にまとまって大きな仕事をしているのです。Study Group on Contemporary Issues and Marxian Economicsというのを頭文字だけ取って集団名にしています。ところが馬場さんの場合が典型だと思うけれども、お互いの議論というのがないのです。我々から見ると川上、馬場という辺りは兄貴分という感覚ですが、彼らから見ると先生格で煙たいのでしょうか。粕谷さんあたり、そのへん、「あいだパラダイム」でうまくやってくれませんか（笑）。東京にいる人でないとできないので、両方につながりがあるような人が、両世代間の議論をもう少し冷静に豊かに仲介してもらいたい。

**萩原** 今はインターネットがありますから、それでネットワークがつくれるんですよ。

**福留** そういうことをぜひ粕谷さんにはお願いしたいなという気がします。

**萩原** 面白いブログを作ったらどうですか。息子さんに作ってもらって（笑）。

**川上** 粕谷君のやつじゃあ、書いてあることがよくわからないというような（笑）。

**福留** いや、よく勉強される方だから、きっと両方をうまくつないで。

萩原 それではこれで終わりにしたいと思います。

(了)